

熊本県文化財調査報告 第114集

灰 塚 古 墳

県営畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査

1 9 9 1

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第114集

灰 塚 古 墳

県営畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査

1 9 9 1

熊本県教育委員会



1. 第一主体・第二主体並列状況



2. 第一主体の内部状況

序 文

農業の近代化をめざす各種の農業整備事業は、県下の各地で実施されており、施工面積が広範囲におよぶため、その区域内に文化財が含まれることが多くなってきております。

施工区域内に文化財が含まれる場合、事前に農政部局や地元と協議を行い、極力保存にご協力をいただいておりますが、止むを得ず破壊を受ける部分については発掘調査を行い、記録保存の措置をとっております。

ここに報告する灰塚古墳は、県営畑地帯総合土地改良事業（うてな北部地区）に伴って発掘調査を実施したものであります。

この古墳の取り扱いについては、着工後に主体部が発見されたため、その時点では現状保存が困難な状況にありました。今後の取り組みにおいて、大いに反省し、教訓としなければならないと考えます。

調査の結果、灰塚古墳は、県北部の古墳文化を考えるうえで大きな意味をもつものでした。とくに、木棺と石蓋土壙の二つの主体部が確認され、この地域の首長系列の古墳と考えられます。

灰塚古墳の調査成果を報告するにあたり、この成果が学術研究のみならず、広く県民の皆様に活用され、文化財愛護などに役立てられることを期待いたします。

最後に、調査などについて終始ご協力をいただいた菊鹿町教育委員会をはじめ、菊鹿町役場、県農政部農地建設課、県鹿本事務所耕地課、及び地元の関係者の方々に対し、心から感謝の意を表します。

平成3年3月31日

熊本県教育長 佐藤 幸一

例言

1. 本書は、昭和63年度・平成元年度に発掘調査を実施した灰塚古墳（熊本県鹿本郡菊鹿町池永所在）の発掘調査報告書である。
2. 灰塚古墳は、県営畑地帯総合土地改良事業（うてな北部地区）に伴う事業に際して、依頼を受けて調査を実施した。
3. 本書の執筆は、松本健郎・坂田和弘が分担して行い、池田栄史（琉球大学法文学部）、松下孝幸・分部哲秋・佐伯和信・小山田常一・折原義行（長崎大学医学部）、戸高真知子（宮崎県教育庁文化課）の各氏からは玉稿をいただいた。
4. 発掘調査現場での遺構の実測・写真撮影等は、各調査員で行った。遺物の実測は、坂田が行い、一部山城敏昭が行った。遺構・遺物のトレース、付図の作成、写真については、坂田・白石 巖・丸山伸治・加来恭子・瀬丸延子・木下春千代が行った。
5. 本書で使用したレベル値（L＝）は、全て海拔高である。方位は、磁北である。
6. 出土品、実測図、写真等の資料は、熊本県教育庁文化課で保管している。
7. 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、坂田が担当した。

要 旨

灰塚古墳は、熊本県鹿本郡菊鹿町大字池永^{いけなが}にありました。古くから古墳として知られていましたが、県営の畑地帯総合開発事業に際して工事対象地となりました。この古墳は試掘調査で古墳と確認できず、工事が始まってしまいました。ところが、工事中にこの古墳の一方の棺が壊され、人骨が出土したため、工事を中止して調査を行なうことになりました。その結果、多くのことが分かりました。

古墳の形は工事のため、すでに壊されていたので、正確には分かりませんが、たぶん円形ではないかと思われます。古墳の表面には、古墳の土の流出を防ぐために石が積まれていた（これを葺石^{ふきいし}といいます）ようで、そのなごりの石がたくさんありました。古墳は、粘土などを交互に混ぜて突き固め、簡単にこわれないように造ってありました。

古墳の中には二つの違った形の棺がありました。一つは地面に穴を掘り、それを棺として中に遺体をいれて、石の蓋をしたもの（石蓋土壙墓^{いしぶたどこうぼ}）です。もう一つは、丸木を半分に割り、中をくり抜いて棺にしたもの（割竹形木棺墓^{わりたけがたもっかんぼ}）です。棺の中には、それぞれほぼ一体ずつの人骨が納められていました。棺の内と外には赤色の顔料がまかれ、真っ赤になっていました。

棺と一緒に入れられたもの（副葬品^{ふくそうひん}）は、ありませんでした。もともと棺内には何も入れていなかったと思われます。ただ、棺の外にあったと思われる鉄の斧などが見つかっています。

この中で特に注目すべき点は、古墳の造りが非常に丁寧なことと、違った形の棺が二つあったということです。これは県内でも非常に珍しいことです。

では、いつごろの古墳であるのかということ、それがはっきりとはしません。古墳の時代を決めるのには、普通、古墳にともなう品物（特に土器など）をもとにしています。ところが、この古墳では、はっきりと年代を決める品物が伴っていないため明らかにならないのです。ただ、棺の作り方などを、これまで見つかった古墳のものと比べて考えると、今から約1500年前頃のものではないかと思われます。

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の組織	7
第3節 調査の経過	8
第3章 調査の成果	12
第1節 墳丘	12
第2節 内部主体	18
1. 第一主体	18
2. 第一主体石蓋	21
3. 第二主体	22
第3節 遺物	25
第4章 まとめ	27
付篇	
1. 灰塚出土の赤色顔料について	43
2. 熊本県菊鹿町灰塚古墳出土の人骨	49
3. 熊本県鹿本郡菊鹿町尾迫古墳調査報告	61

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	2
第2図 灰塚古墳周辺現況図	6
第3図 灰塚古墳調査前現況図	9～10
第4図 灰塚古墳墳丘等断面図	13～14
第5図 灰塚古墳完掘平面図	15～16
第6図 第一主体実測図	18
第7図 第一主体人骨出土図	19
第8図 第一主体完掘実測図	20
第9図 第一主体石蓋復元実測図	21
第10図 第二主体部実測図	23
第11図 第二主体部完掘実測図	24
第12図 出土遺物実測図	26

付篇 1		
第 1 図	蛍光 X 線スペクトル図	45
第 2 図	X 線回折スペクトル図	45
表 1	灰塚古墳出土赤色顔料の各試料と分析結果	44
付篇 2		
第 1 図	遺跡の位置図	50
第 2 図	人骨の残存部	52
表 1	人骨一覧	51
表 2	歯の計測値	59
表 3	齧触	59
付篇 3		
第 1 図	尾迫古墳周辺地形図	63
第 2 図	尾迫古墳調査区設定図	65
第 3 図	尾迫古墳出土遺物	66
第 4 図	石室出土凝灰岩製石棺材	67

図 版 目 次

巻頭カラー

1 第一主体・第二主体並列状況

2 第一主体の内部状況

図版 1 灰塚古墳遠景（調査前、調査後）

図版 2 葺石出土状況

図版 3 墳丘盛土状況

図版 4 第一主体・第二主体並列状況

図版 5 第一主体（石蓋除去前、除去後・掘り込み確認状況）

図版 6 第一主体人骨出土状況、第一主体石蓋復元状況

図版 7 第一主体石蓋移転復元状況、第二主体確認状況、第二主体完掘状況

図版 8 出土遺物

付篇 1

図版 1 1. 第一主体頭部 2. 第一主体頭部 3. 第一主体頭部

4. 第二主体腰部 5. 赤鉄鉱 6. 赤鉄鉱

付篇 2

図版 1 灰塚第一主体 1 号人骨

付篇 3

図版 1 1. 発掘前 2. 石室完掘状況
3. 石室完掘状況 4. 羨道部遺物出土状況

第1章 位置と環境

本古墳は、熊本県の北部、鹿本郡菊鹿町大字池永字池田小字柳迫にある。この古墳は、古くから古墳としての認識があったらしく、戦国時代の合瀬川合戦の戦場としての記事においても、灰塚の名が登場する¹⁾。また、池田の集落では「ひゃーつか（灰塚）」の名称でよばれ、何か出土したという言い伝えがある。幽霊譚なども伝えられている。

菊鹿町は行政区分上では、東に菊池市、南に菊池郡七城町、西に鹿本郡鹿本町に挟まれ、北は鹿本郡鹿北町、福岡県矢部村、大分県中津江村と境を接する。

この菊鹿の地には、東に阿蘇外輪山鞍岳の山麓、北に肥筑山地の山麓が位置し、それらから延びる急峻な山地地帯が町の面積の半分以上を占めている。この山地地帯に、大小の河川が開析谷を形成しながら、南へと流れている。内田川、初田川、木野川などがそれである。河川は、多くが蛇行しながら流れ、随所に狭いながらも平地を形成している。その平地には、集落が形成され、農地などの生産の場としての利用も行なわれている。河川はさらに南下し、山地地帯から一種の扇状的な平地にいたり合流する。この平地は南に開口するものの、周囲を丘陵地に囲まれ、盆地状の地形を呈し、菊鹿盆地の名でよばれることもある²⁾。本古墳は、盆地を取り囲む丘陵地のうち、初田川と木野川にはさまれた部分の一角に位置している。この丘陵地は、地質的な特徴から考えると、南の米原台地やうてな台地と、本来一体のものであったようである。それが、初田川の開析谷により切り放され、更に古墳の南側に流れる合瀬川によって切り放されている。従って、丘陵は北東から南西方向に伸び、古墳西側の道路付近から南方向に折れている。本古墳は、調査時には丘陵地の突端に位置していたように見えた。しかし、この丘陵は、地形や道路の法面などの様子から、道路によって西の山地と切り離されたもので、本来は西側の丘陵と繋がっていたようである。これは、明治期の分村図からも確認される。このようなことから、この古墳は丘陵の突端ではなく、細く狭まる丘陵の尾根上にあったのであろう。

本古墳のある菊鹿町とその周辺の市町は、多くの古墳が分布する場所として、注目される地域である。中でも菊鹿盆地を取り巻く山陵地には、古墳が幾つかの群をなして存在している。それらを大きく分けると、西側の鹿本町・山鹿市にかけての内田川の右岸の一群、菊鹿町の木野川と内田川との間の一群、本古墳のある木野川の左岸の一群などである。この中で、鹿本町から山鹿市にかけての古墳群については、頂塚古墳の調査報告において、富田紘一氏による詳細な考察がなされている。ここには、石棺を内部主体とする津袋大塚古墳、頂塚古墳、五社宮古墳などがある。いずれも石棺を内部主体とするものが中心のようで、前期古墳が主である。その中では、五社宮古墳石蓋は、破砕片ではあるが、形態的に見て本古墳との関係をうかがわせるものである。それらから一段下りた内田川の河岸段丘には、平原塚古墳がある。既に墳丘を失い、大形の舟形石棺の棺身だけが残っている。内部主体が、竪穴系横口式石室と思われる



第1図 周辺遺跡（古墳・横穴墓）分布図（2万5千分の1）

朱塚古墳もこの段丘沿いにある。ほかに、横穴式石室を持つ立山古墳もこの群の中にある。これらは、報告の中でも触れられているように、立地による古墳の変遷を追うことができるといふ意味で重要である³⁾。

また、現在町役場などの置かれている木野川と内田川とに挟まれた丘陵地には、儀平山古墳・山の井古墳・熊崎古墳などがほぼ南北に並んでいる。山の井古墳・熊崎古墳は、墳丘を現在ほとんど失い、表面に棺材と思われる凝灰岩が数片露出している。内部主体は、露出している凝灰岩の大きさなどから考えて、多分小型の横穴式石室であろう。一番北にある儀平山古墳は直径が約20m、比高差が約3mの円墳である。内部主体は不明である。そのほか、この山上には、役場の庁舎の南西の山中に古墳と思われる高まりがある。かなり削平されているが、内部主体などの施設は見られない。一方、この丘陵を下りた下永野の集落の中には、陳の釜古墳・陳の内古墳がある。両古墳とも内部主体として大型の石材を使用した横穴式石室を持っている。

本古墳の位置する木野川の左岸には、銭亀塚古墳群・尾迫古墳・鬼の竈古墳・頭合古墳などがある。銭亀塚古墳群は、灰塚古墳の北西約70mの丘陵の尾根上に3基並んでいる。銭亀塚古墳は、このうちの一番南に位置するものをさすようである。この古墳は、径が約20m、比高差が3mほどの円墳で、墳丘に葺石と思われる20cm大の石がかなり残る。墳丘の南側が一部削られ、地山の凝灰岩が露出している。墳丘のまわりが後世地下げされたのでなければ、この古墳は地山整形をして、築造された可能性がある。内部主体は不明である。他の2基は、『鹿本町史』によれば、南から銭亀塚B古墳、銭亀塚C古墳となっている。B古墳は、かなり削平され、現状ではほとんど古墳としての形状を留めていない。C古墳は丘陵の突端にあり、現在削平され平面形が三角形を呈している。本来は円墳であろう。両古墳とも内部主体は不明である⁴⁾。

尾迫古墳は、銭亀塚古墳の東側約150mのところの位置し、銭亀塚古墳群のある丘陵と谷をは
遺跡地名表（左図対照）

1. 灰塚古墳	18. 徳塚古墳	35. 北上原古墳
2. 立德鬼の竈古墳	19. 立山古墳	36. 瀬戸口横穴墓群
3. 黄金塚古墳	20. 千年山古墳	37. 古古墳
4. 尾迫古墳	21. 朱塚古墳	38. うてな方形周溝墓
5. 銭亀塚古墳群（3基）	22. 平原塚古墳	39. 阿高横穴墓群
6. スズメ迫横穴群	23. 頂塚古墳	40. 樋之口（B）横穴墓群
7. 頭合古墳	24. 頂塚墓地石棺	41. 山田・槍迫樋之口（A）横穴墓群
8. 陳の釜古墳	25. 五社宮古墳	42. 井樋谷・大井戸樋横穴墓群
9. 陳の内古墳	26. 湯の口横穴墓群	43. 袈裟尾丸山古墳
10. 今山石棺群	27. 茶臼塚古墳	44. 袈裟尾高塚古墳
11. 日渡横穴墓群	28. 小町塚古墳	45. 袈裟尾茶臼塚古墳
12. 大塚古墳	29. 小町塚下石棺	46. 山崎古墳
13. 長谷古墳群	30. 津袋大塚古墳	47. 十蓮寺石棺
14. 四道田横穴墓群	31. 御霊隠穴古墳	48. 十五社宮古墳
15. 儀平山古墳	32. 御霊塚古墳	49. 早馬塚古墳
16. 熊崎古墳	33. 坂東石棺	50. 坂本さんの墓（古墳参考地）
17. 山の井古墳	34. 原部石棺	

さんで対する丘陵の尾根上にある。この古墳は調査がなされており、その報告を後に載せているので詳細は省くが、横穴式石室墳であった。明確な墳丘は持たないようである。現在は、栗園の中に埋もれてはいるが見ることができる。

鬼の竈古墳は、銭亀塚古墳群・尾迫古墳などと同じ丘陵の南東の方向にあり、立德の集落の向背地にある。この古墳はすでに墳丘の土が流出し、現在単に巨石が数枚残るのみで、巨石を利用した横穴式石室墳であったことが推定される。頭合古墳は、さらに南に位置し、丘陵を一段降りた、頭合の集落の北側にある。直径約20mの円墳である。内部主体は横穴式石室で数枚の巨石を腰石にし、コの字形の仕切りを内部にもつ。所有者により、復元されているが、正確ではない。今は信仰の対象となっており、祭られている。復元工事の際に遺物が出土したらしいが、詳細は分からない。

また、銭亀塚古墳群の直ぐ東下の崖面は、凝灰岩の露頭があり、そこに横穴墓群がある。これがスズメ迫横穴群である。9基程確認される。残りはかなりよいものがあるが、ごみ捨て場になっており、内部の確認はできなかった。以前、管玉・金環などが出土したという。

さらに、初田川の左岸には、昭和62年に調査された黄金塚古墳がある。この古墳は、二つの横穴式石室を内部主体とする。普通の大きさの石室と、その左側に非常に小型の石室とをもっていた。既に盗掘を受けていたが、遺物には玉類、須恵器等があった。時期は6世紀の後半にあてられよう⁵⁾。この他にも「坂本さんの墓」とよばれる場所や池田の墓地においても古墳らしきものが見られる。

このように多くの古墳が存在する当地域ではあるが、古墳時代の生活跡はまだ確認されているとは言い難い。菊鹿町内では下内田の農協敷地内の調査で住居跡が部分的に確認されている⁶⁾。また、鞠智城跡の調査においても古墳時代後期の住居跡が確認されている⁷⁾。この他、鹿本町の津袋大塚遺跡では6世紀のかまど付きの住居跡が確認されている⁸⁾。しかし、それよりもさかのぼるものはわかっていない。本古墳の周辺に弥生時代の遺物などが見られるところから、それに続く古墳時代前期の遺跡もあると思われる。今後の調査に期待されるところである。

註

- 1) 例えば、「隈部軍記」『肥後古記集覽』(1821年成立)では、永禄2(1559)年の合勢川合戦についての記事で隈部氏が陣地を設置した場所として、池田の灰塚の名が登場する。
- 2) 『菊池・大津地域土地分類基本調査 菊池』熊本県土地利用対策課 1982年
- 3) 富田紘一『頂塚古墳発掘報告書』鹿本町教育委員会 1986年
- 4) 富田紘一「原始・古代」『鹿本町史』鹿本町役場 1976年
- 5) 昭和62年度の畑地帯総合土地改良事業(うてな北部地区)に際して県文化課で調査。
- 6) 註4)に同じ。
- 7) 昭和63・平成元年度、県文化課で調査。
- 8) 註4)に同じ。

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

県営農業基盤整備事業については、前年度に農政部の担当課から、施工予定地の文化財の有無、取り扱いなどについて事前協議がある。

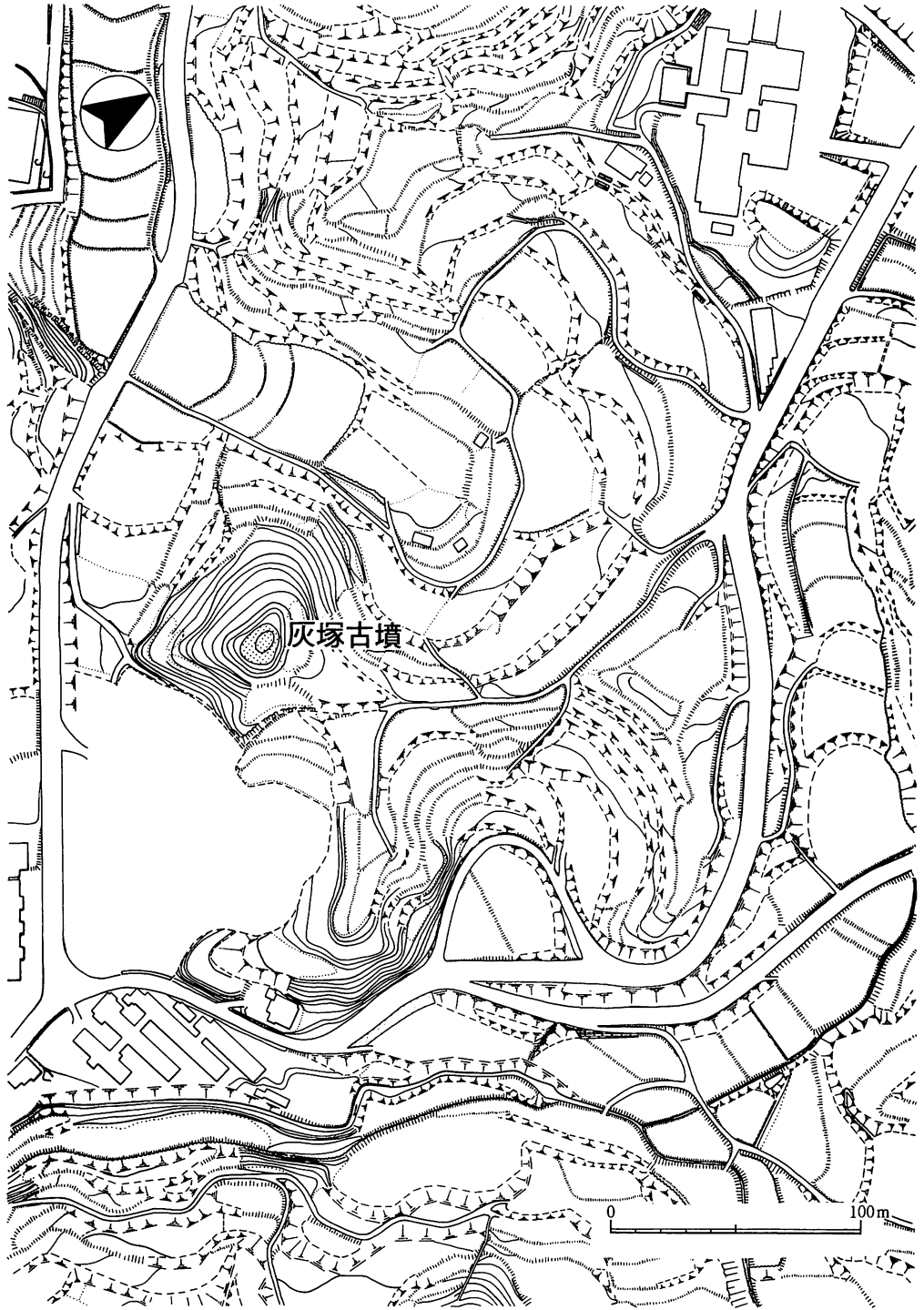
灰塚古墳の含まれる畑地帯総合土地改良事業（うてな北部地区）については、昭和62年9月に施工予定地の事前協議を受けた。それによると昭和63年度には、鹿本郡鹿本町の御宇田台地と同郡菊鹿町の灰塚古墳周辺が予定地となっていた。この協議を受けて、昭和62年10月、文化課の松本健郎が現地を踏査し、鹿本町部分については縄文・弥生時代の遺跡（陳の上遺跡）、菊鹿町部分については灰塚古墳が含まれることを通知した。これを受けて、陳の上遺跡については試掘の依頼があり、昭和62年12月9日～10日、文化課文化財保護主事・木崎康弘、同園村辰実が試掘調査を行い、遺跡の範囲・深度・内容等の確認を行った。

灰塚古墳についての現地踏査時の所見では、墳丘の一部が開墾等によって削平を受け段状の地形になっているが、表面には葦石が観察され、墳頂部には盗掘坑もなく、遺存度は比較的良好と判断された。この結果を県鹿本事務所耕地課に伝え、その取り扱いについて協議を行った。同事業では、昭和62年度施工地区に黄金塚古墳が所在し、設計上現状保存が不可能ということで、止むを得ず記録保存の措置を取った。さらに、64年度以降の施工予定地区には、銭亀塚古墳1～3号墳・尾迫古墳なども含まれる予定であり、全体的に古墳の保存について協議を進めていた。

昭和63年3月、菊鹿町教育委員会は、某氏に依頼して灰塚古墳の試掘調査を行い、その結果、灰塚古墳は古墳ではないとの判断が下された。

この試掘結果を受けて、農政部は昭和63年9月、63年度事業に着手した。工事は順調に進み、灰塚の採土に取りかかったところ、墳頂部付近で石棺（調査の結果、石蓋土壙であったが）の蓋を発見した。施工業者（青木工務店）は直ちに工事を中止し、発注者である県鹿本事務所耕地課に連絡、鹿本事務所耕地課から文化課の松本へ連絡があった。昭和63年12月5日のことであった。電話では現状の保存を依頼し、翌日の朝、現地に急行した。現地には、鹿本事務所耕地課、菊鹿町役場、菊鹿町教育委員会、菊鹿町文化財保護委員、施工業者等の関係者が参集し、状況の確認と今後の措置等について協議を行った。

工事によって墳丘の大半は削平され、墳頂下約1.5mに蓋石が露出していた。蓋石は家形を呈し、工事によって約3分の2ほどが取り除かれていた。内部には工事による流入土があったが、棺身部の遺存状態は良好と判断された。周辺部の工事は相当進んでいたが、取りあえず約20m四方を当分保全し、調査について検討することとしたが、予定外のことで、調査に着手したのは平成元年3月であった。



第2図 灰塚古墳周辺現況図

第2節 調査の組織

昭和63年度（現地調査）

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 江崎 正（文化課長） 林田敏嗣（文化課課長補佐）
隈 昭志（文化課課長補佐）
松本健郎（文化課調査第一係長）
調査総務 松崎厚生（文化課主幹・経理係長）
上村祐司（文化課主事） 泉野順子（文化課主事）
調査員 坂田和弘（文化財保護主事） 浦田信智（文化課嘱託）
専門調査員 松下孝幸（長崎大学医学部助教授）
佐伯和信（長崎大学医学部助手）

平成元年度（現地調査）

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 江崎 正（文化課長） 隈 昭志（教育審議員・課長補佐）
中川義孝（文化課課長補佐）
松本健郎（文化課調査第一係長）
調査総務 上村忠道（文化課経理係長）
上村祐司（文化課主事） 泉野順子（文化課主事）
調査員 坂田和弘（文化財保護主事） 浦田信智（文化課嘱託）

調査参加者（昭和63年度・平成元年度）

平井イツ子、井上友子、平井信行、井上育誠、平井進、平井フミエ、中原英子、井上アヤ子、中原敏継、丸山チエ子、中原洋子、丸山よし子、平井そのお、河津美優子

平成2年度（報告書作成）

調査責任者 江崎 正（文化課長） 隈 昭志（教育審議員・課長補佐）
中川義孝（教育審議員・課長補佐）
松本健郎（文化課調査第一係長）
調査総務 上村忠道（文化課経理係長）
大廣美枝子（文化課主任主事） 川上勝美（文化課主任主事）
調査員 坂田和弘（文化財保護主事）

専門調査員 松下孝幸（長崎大学医学部助教授）
 分部哲秋・佐伯和信・小山田常一・折原義行（長崎大学医学部）
 戸高真知子（宮崎県教育庁文化課）

調査協力者（昭和63・平成元・2年度）

県農政部耕地第一課、県鹿本事務所耕地課、菊鹿町役場、菊鹿町教育委員会、
菊鹿町文化財保護委員会
青木工務店、砥石川鉄工所

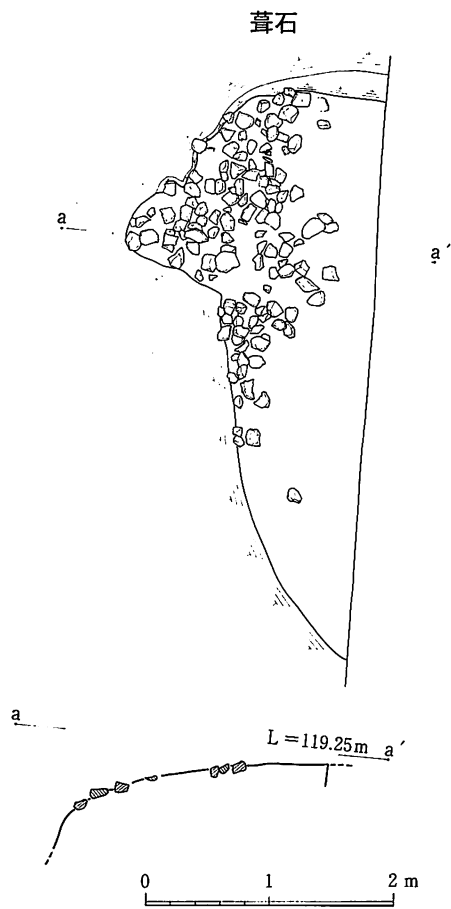
岩崎卓也（筑波大学教授）、甲元眞之（熊本大学助教授）、高木恭二（宇土市教育委員会）、
中村幸史郎（山鹿市立博物館）、浦田信智（西合志町教育委員会技師）、村上恭通（広島大学）、
坂本重義、吉内素子、安達武敏、高木正文、園村辰実、住田幸恵、大田幸博、西住欣一郎、瀬
丸延子、加来恭子、山城敏昭、丸山伸治、木下春千代（県文化課）

第3節 調査の経過

調査は昭和63年3月6日から開始し、年度を越えて、平成元年5月26日までの3ヵ月に渡った。

調査は、先に述べたように既に周辺部が削平され、墳丘も大半が破壊された状態から開始した。そこでまず、破損状態を含めた現況の測量を行った。非常に狭い範囲でしかも、周囲は削られ、比高差5～6mを計るように入り切った崖面もあり、危険を覚悟しながらの測量であった。それが無事終了したのちに、3月14日から発掘調査に取り掛かった。調査のきっかけとなった石蓋を持つ主体部を中心に、墳丘調査も並行しての発掘となった。この主体部には工事現場作業員の話から、内部には人骨が残っていることがすでに分かっていたため、慎重に流入土を取り除いたところ一体分の人骨が現われた。そこで、3月16日に長崎大学医学部解剖学第2教室の松下孝幸助教授らを招いて、人骨の取り上げをしていただいた。その際の所見として、性別は男性？、年齢は若いのではないか、ということであった。その後、更に内部を精査し、この主体部が石棺ではなく、土壙墓であることが確認された。

主体部は、当初一つとの予想で調査を進めていた。ところが、石蓋土壙墓の西側に、塗布された赤色顔料がずっと伸びていたため、西側へトレンチを設けたところ、3月22日に至り、粘土槨に包まれた木棺と思われるものが現われた。更に、細心の注意をはらい盛り土を除去したところ、粘土槨と木棺の痕跡が確認された。しかも、僅かではあったが、人骨らしきものが残っていた。ここに至って、埋葬方法の異なる主体部が同じ墳丘内にあることがわかった。そこで石蓋土壙墓を第一主体、木棺墓を第二主体とした。同時に、これらの主体の前後関係も問題と



第3図 灰塚古墳



調査前現況図

なってきた。これは、墳丘の調査とも大いに関係するものであった。

一方、墳丘調査も主体部調査と同時並行して行なわれた。墳丘は、既に大半の盛り土が削られているので、残された墳丘の状態から内部主体と墳丘の関係、墳丘の規模等についての情報を得ることに努めた。調査はまず、当初から明確であった石蓋土壙墓を仮の中心にして、墳丘を大きく4分割した。そして、それぞれの分割線に幅50cmの土層観察面を残し、全ての墳丘を除去し、整地面まで下げることにした。ただ、南北については、そのままの観察面では残り部分が少なかったため、土層観察面を1mほど西側にもう一つ設けた。また、墳丘盛り土の除去に際しては、土層を一枚毎にできるだけ剥ぐようにした。その結果、かなりの情報が墳丘について得られた。更に、二つの主体部についても不完全ながら前後関係が想定できた。

調査後、現地にそのまま主体部を残すことは、困難な状況となっていた。そのため、蓋石だけでもどこかに移築できないか町教育委員会にはかったところ、地域住民の意向もあり、池田の公民館の裏に移築することができた。現在、そこに覆いを施して保存してある。

第3章 調査の成果

第1節 墳丘（第4図）

墳丘の位置していた場所は、調査を開始する時点では、既に工事によって古墳の主体部分のあるところだけが残され、回りは地下げされて5～6mの塔状になっていた。従って、旧地形を知るには、工事前の現況図に頼らざるをえなかった。現況図によれば、本古墳は南西から北東へ伸びた丘陵の端部近くにあったようである（第2図）。さらに土地の人の話や古図などによれば、古墳の西側を南北に走る道路は古くからのものではなく、戦後に西から伸びる丘陵を切断して開通させたものようである。とすれば、道路を挟む向かいの丘陵と一帯としてこの丘陵も捉えることができる。その丘陵の狭い鞍部に本古墳は築造されたものといえよう。南北は、谷が入るため、連続する丘陵の中にあっても、周囲の環境の中では十分にその高さを誇る事が出来そうである。

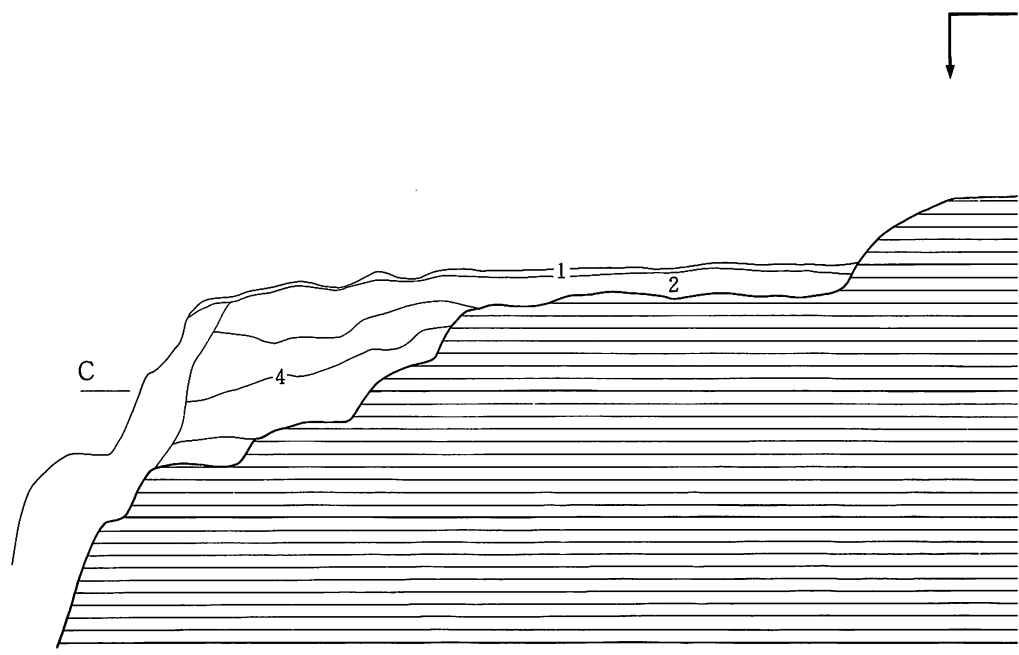
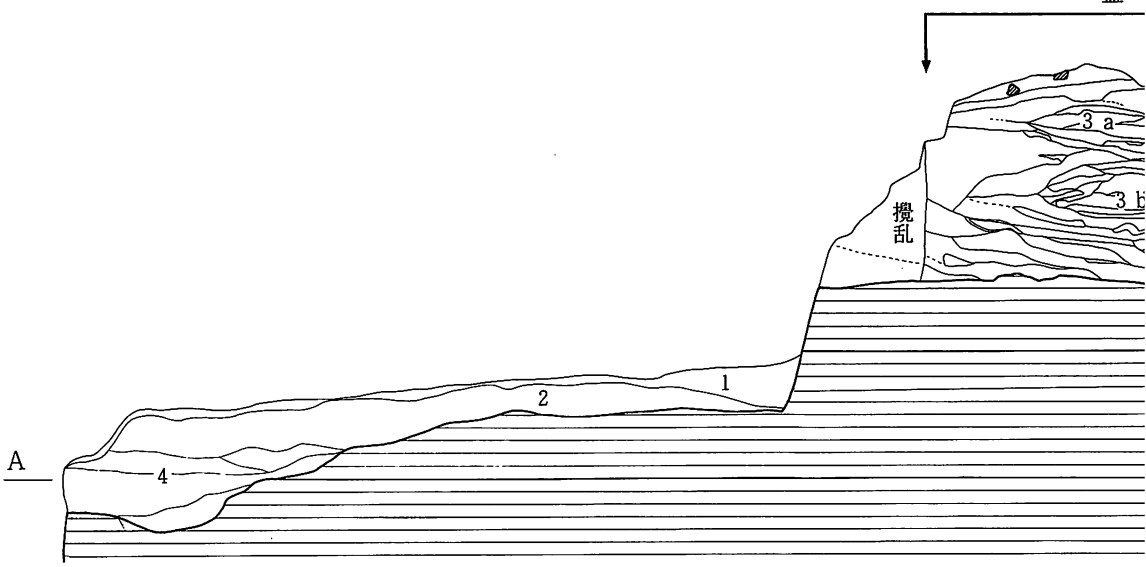
墳丘はさきにも述べたが、工事により既にかなり破壊されていた。しかし、調査開始前に現況をできるだけつかむため、平板測量を行った（第3図）。その際、墳頂部及び周辺に20cm～30cmほどの河原礫の分布が見られ、葺石の存在が推定された。この測量においては破壊が大きかったため、墳形の決め手となるような情報は得られなかった。ただ、ここが古くから、塚状になっていたこと、葺石らしきものもたくさんあったこと、近年、特に戦中戦後の食料難の時期にかなり開墾・削平がなされたということが地元の調査参加者のことばにより判かった。その際の地形の改変も進んでいるようである。

当初、第二主体が分かっていなかったために、墳丘の中心は仮に石蓋土壙墓であるとして、調査を進めることにした。そこで石蓋土壙墓の主軸を延長し墳丘の南北中心線とした。さらに、土壙の二等分点を中心として垂直線を東西に延ばし十字形の地区割りをした。そして、それぞれの軸に沿って、土層観察面を残し、墳丘を断ち割ることにした。ところが、土壙の南北延長線上では、削平された部分が多く、土層観察面が形成でき難いため1mほど西側の、一番墳丘の遺存していると思われるところに、ほぼ南北の観察面をもうけた。第二主体の発見されたすぐ西側であった。

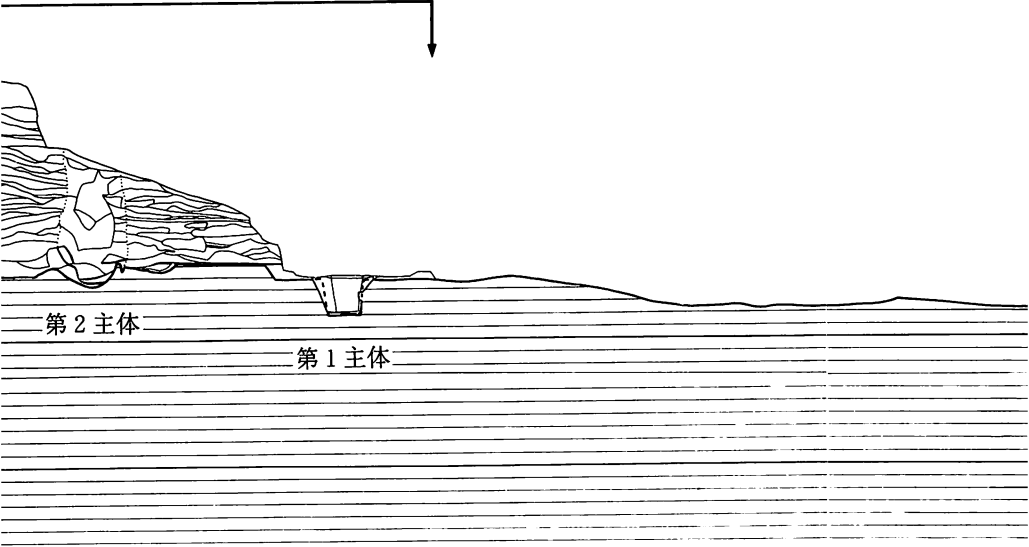
土層観察面は、第4図の様であった。観察結果の概容は次のとおりである。まず、地山層として粘性の強い黒褐色層（第5図黒アミ部分）がある。古墳築造の際造成し、平坦部にしたと思われる部分全体に広がっていたようである。この層は、地山本来のものではなく、黒褐色層の下にある自然層の淡黄灰色粘質土に何か染み込んだ結果、このような黒褐色層が形成されたようである。

主体部はこの層に設置されていた。第一主体と第二主体は、ほぼ同時期もしくは、第一主体が第二主体より若干はやく設置されていたと思われる。というのは東西の土層観察面が不備の

盛

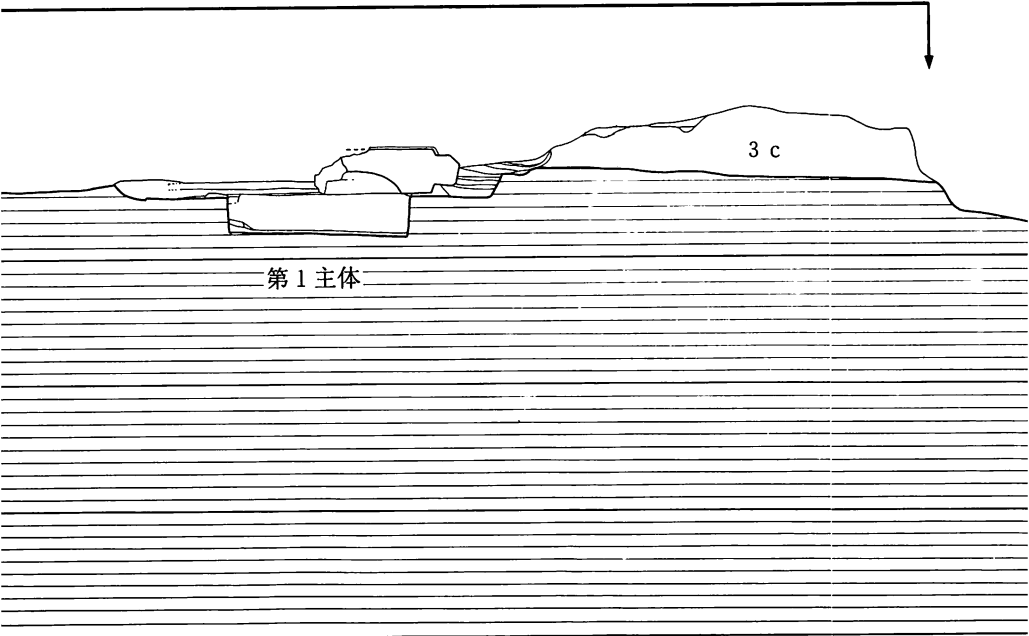


土 範 冢



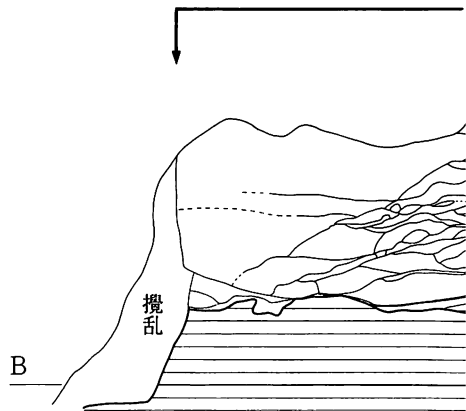
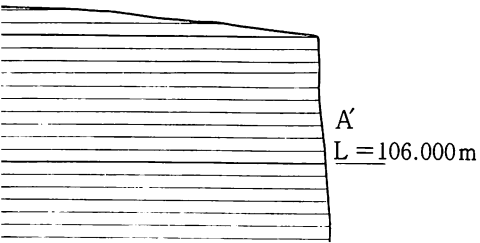
A-A' 断面图

盛 土 範 冢



C-C' 断面图

第 4 图 灰塚古墳墳丘等断面图



1 : 暗褐色土、表土

2 : 暗褐色土～黄褐色土、盛土を

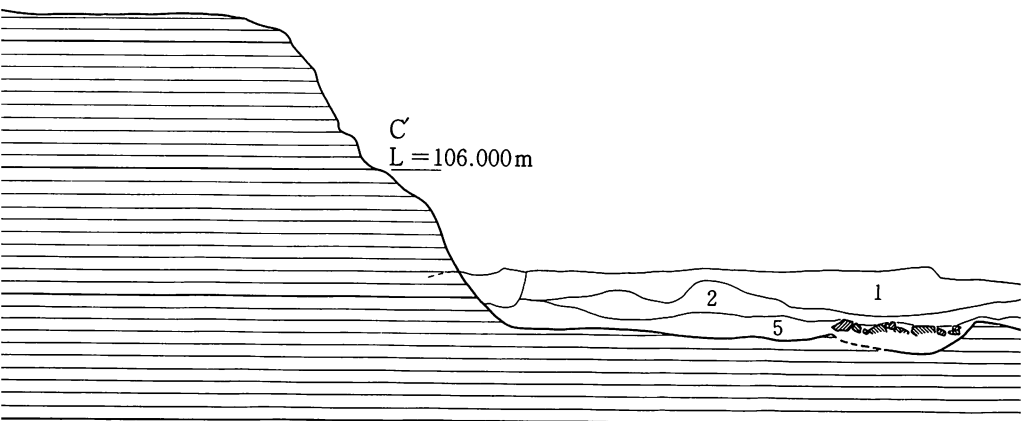
3a : 暗褐色土～黒褐色土、盛土

3b : 暗褐色土～灰褐色土、盛土

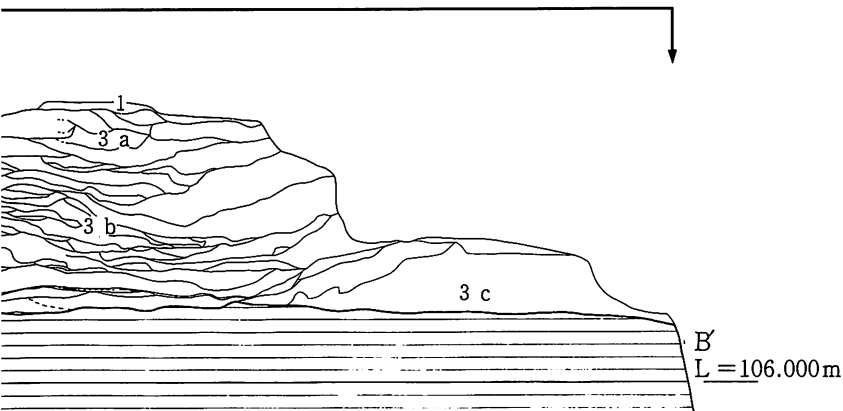
3c : 暗灰色土：粘土、盛土

4 : 暗褐色土に暗灰色土のプロッ

5 : 黄灰褐色土：凝灰岩の攪乱土

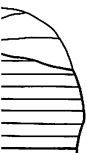
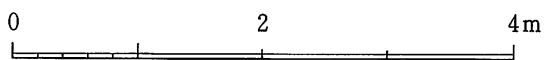


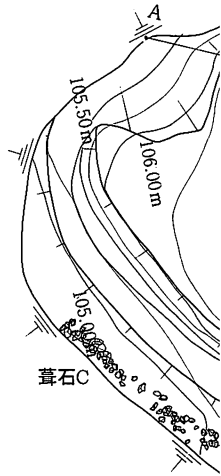
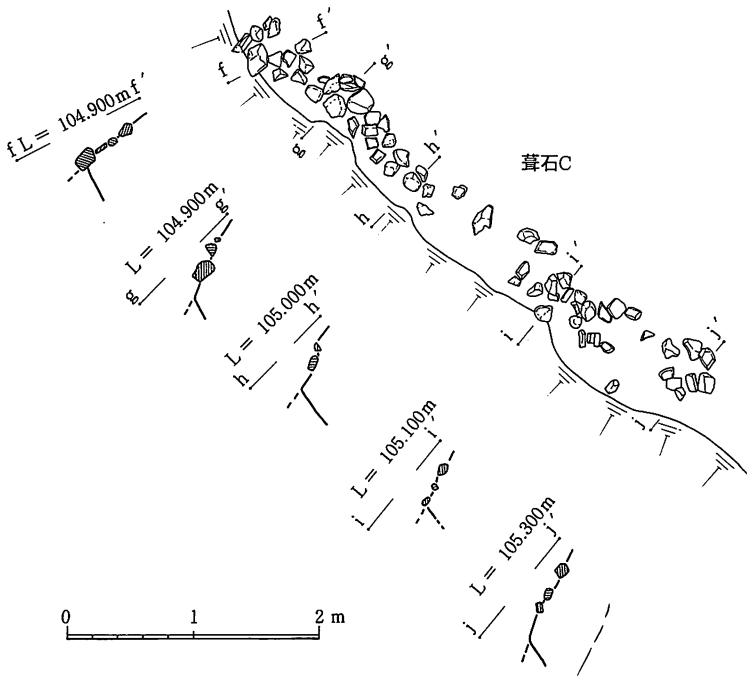
盛 土 範 囲

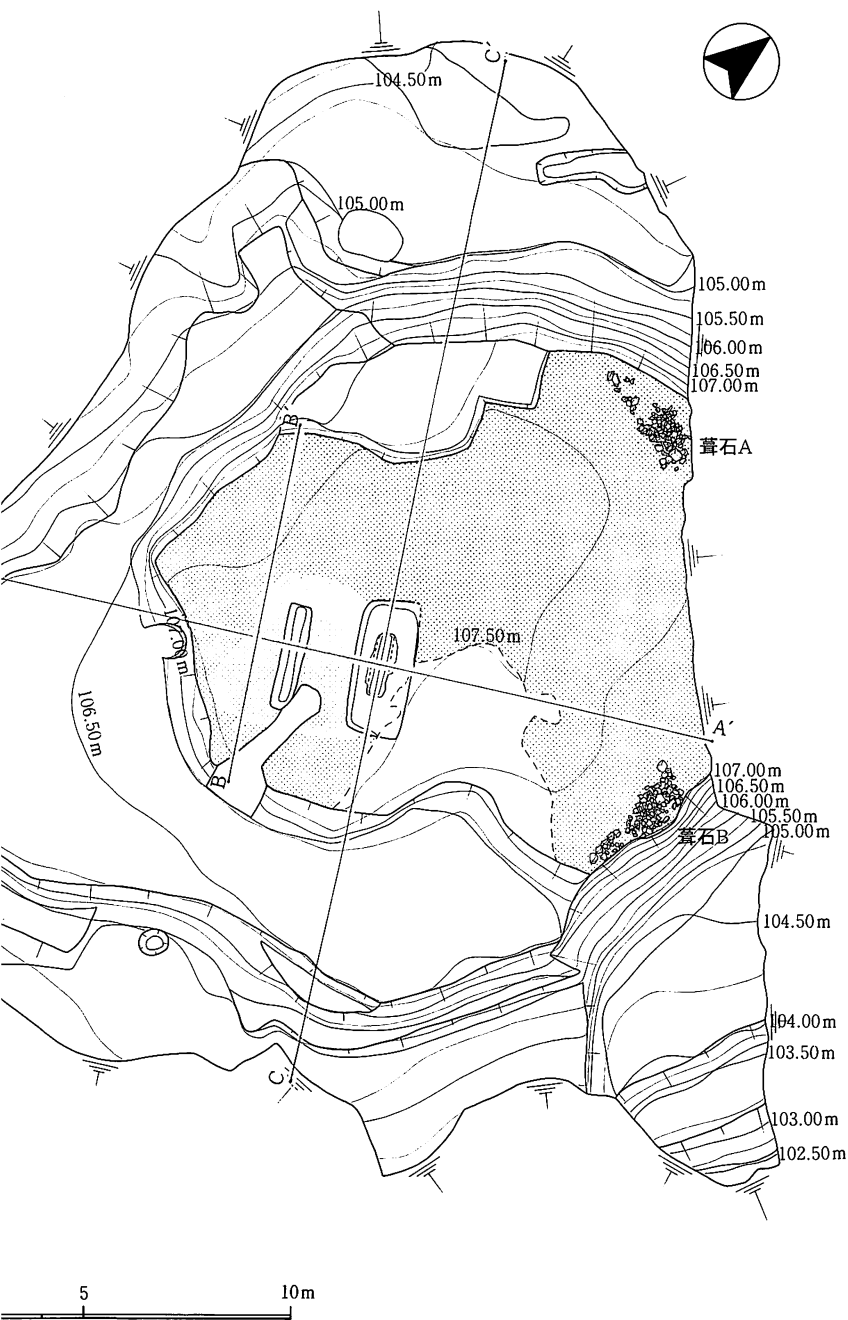


B-B' 断面図

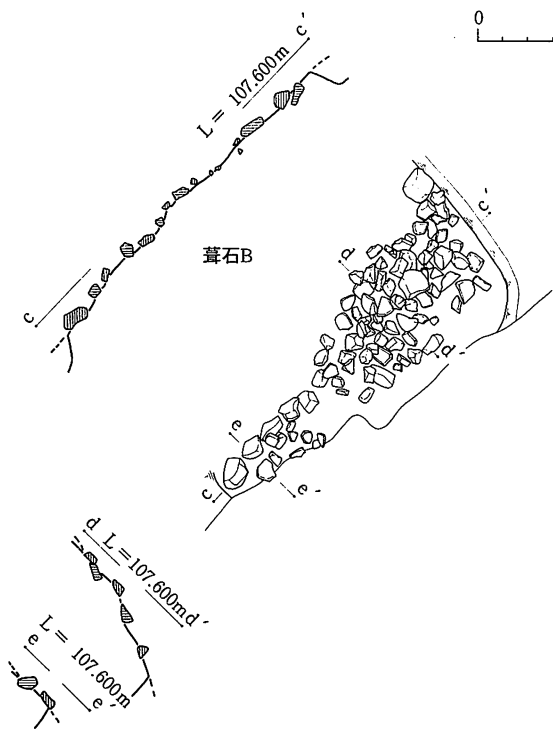
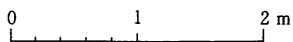
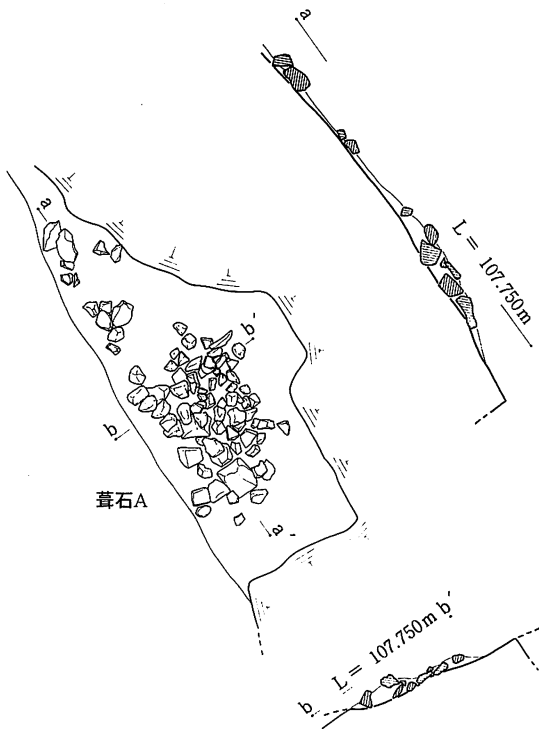
削平した際の攪乱土







第5图 灰塚古墳完掘平面图



ためあまり明確ではないが、第二主体の設置された部分では、盛土がやや西に高く傾斜し、しかも築成が雑であるからである。次に、盛土層が黒褐色層の整地面の上にあった。観察面と墳丘土の発掘に際しての所見から、この盛土のあり方が分かった。主体部は、粘土によって密閉されていた。この主体部の周囲には、白色粘土や褐色の粘質土を土塊として大まかにドーナツ状に配置していた。次に主体部のある内側には粘土、粘質のローム土、及びそれらの混合土を交互に5～10cmの厚さで突き固めて、版築状に盛土を形成していた。最終的に墳丘を造り上げた後に、葺石を配置したと思われる。

葺石と思われる石が墳丘調査する中で、あちこちで見られた。ほとんどが以前の削平や工事などで動いていたが、原位置を留めるとと思われる葺石が、残存する墳丘の端部で3箇所ほど確認された。A地点では、石列の直ぐ下に墳丘の整地面があった。B地点では、整地面より40cmほど褐色の盛土がなされた上の部分に並んでいた。更にC地点では、かなり削平された部分に石列が並ぶもので、確実に原位置を保つか分からないものであった。この石列の下は、基盤の凝灰岩が現われていた。いずれも一列ないし二列残っていた。これらの遺存する葺石は、ほぼ円形状になるようである。この葺石を全て採集することはできなかったが、サンプルとして、十数個取り上げた。後日鑑定していただいた結果、石質は砂岩を始め、角閃石安山岩・流紋岩・花崗岩などであった。いずれもこの地域の河川にあるもので、現在でもこの地域では石垣などに利用されている。

このような観察と所見から墳丘の形状と規模を想定することは難しい。残っている葺石や墳丘の盛土などからは、墳丘がその部分まではあったと推定できるが、必ずしも墳丘の規模とは一致しない。墳丘が盛土に加えて地山の削り出しを行っていた場合も想定できるからである。その理由として、C地点の葺石があげられる。この地点では、盛土の部分ではなく、凝灰岩の上に葺石が並んでいた。凝灰岩は地山としてはかなり下層にあり、崖面以外では表面に露出していないものである。しかもA・B地点とこのC地点の葺石とは1m以上の高低差がある。これは、墳丘規模に大きな影響を与える。墳丘裾がほぼ水平と考えた場合、A・B地点によって想定される墳丘の規模が28m前後であるのに対して、C地点で想定すると44mになってしまうのである（いずれも第一主体を中心とした円墳を想定）。かなりの規模の差を示している。

結論としては、ここで墳丘の規模、形状について想定しても推測の域をでない。ただ、墳丘築造の工程を土層観察より部分的に復元できるのみである。

第2節 内部主体

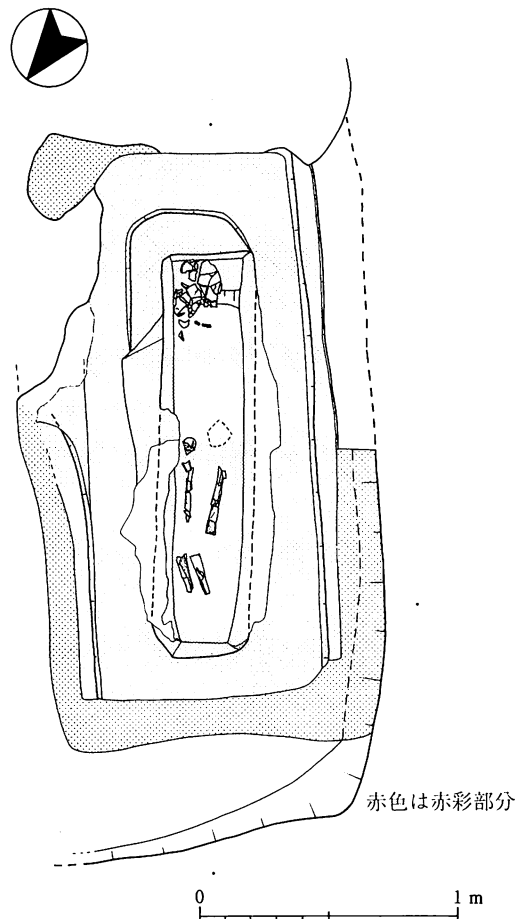
1. 第一主体

第一主体は、石蓋土墳墓である。本古墳の調査は、この石蓋が破壊され、中より人骨が出土したことに始まる。試掘調査では、試掘坑が蓋石を取り巻く「粘土槨」の直ぐ上をかすめていた様である。そのため、その粘土槨を地山と見誤ったのであろうか。

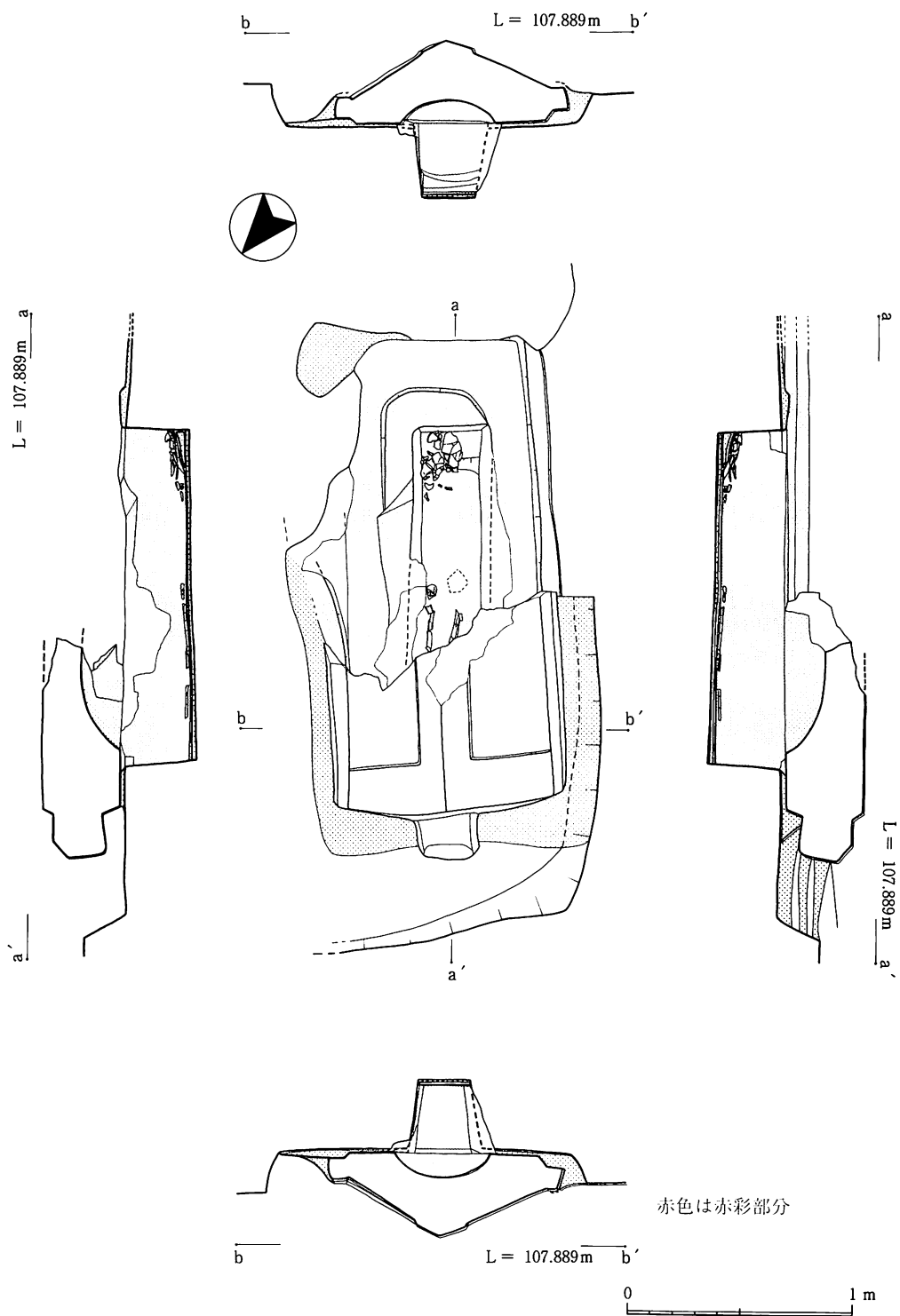
この主体は、2段掘りの土壇に石蓋を被せたものである。まず、地山整形をして平坦にした粘性のある地面に南北長2.65m、東西幅1.40mの隅丸長方形で、深さ15~17cmの規模で一段目の掘り込みが行われている。さらにその中央部に墓壇として南北長1.55m、東西幅0.35mの長方形で、深さ0.30mに二段目の掘り込みがなされている。主軸線はS-37°-Eで、やや南東方向にずれている。掘り込みにはいずれも丁寧な赤色顔料の塗布がみられた。

墓壇底には厚く2~4cmの赤色顔料を敷いている。側壁面にも顔料が塗布されていた。厚く塗られており、刷毛目らしきものの残る部分もあった。さらに、棺の南側には粘土と顔料を敷き詰め、5cm程の高まりを作り出して枕としていた。これを枕として頭位方向を南東に向けた遺存状態の良好な人骨が一体分あった。特に頭骨と下肢骨は軟化してはいたが、残りがよかった。取り上げにあたった長崎大学の松下助教授の所見によれば、若年の男子ではないかとのことである。

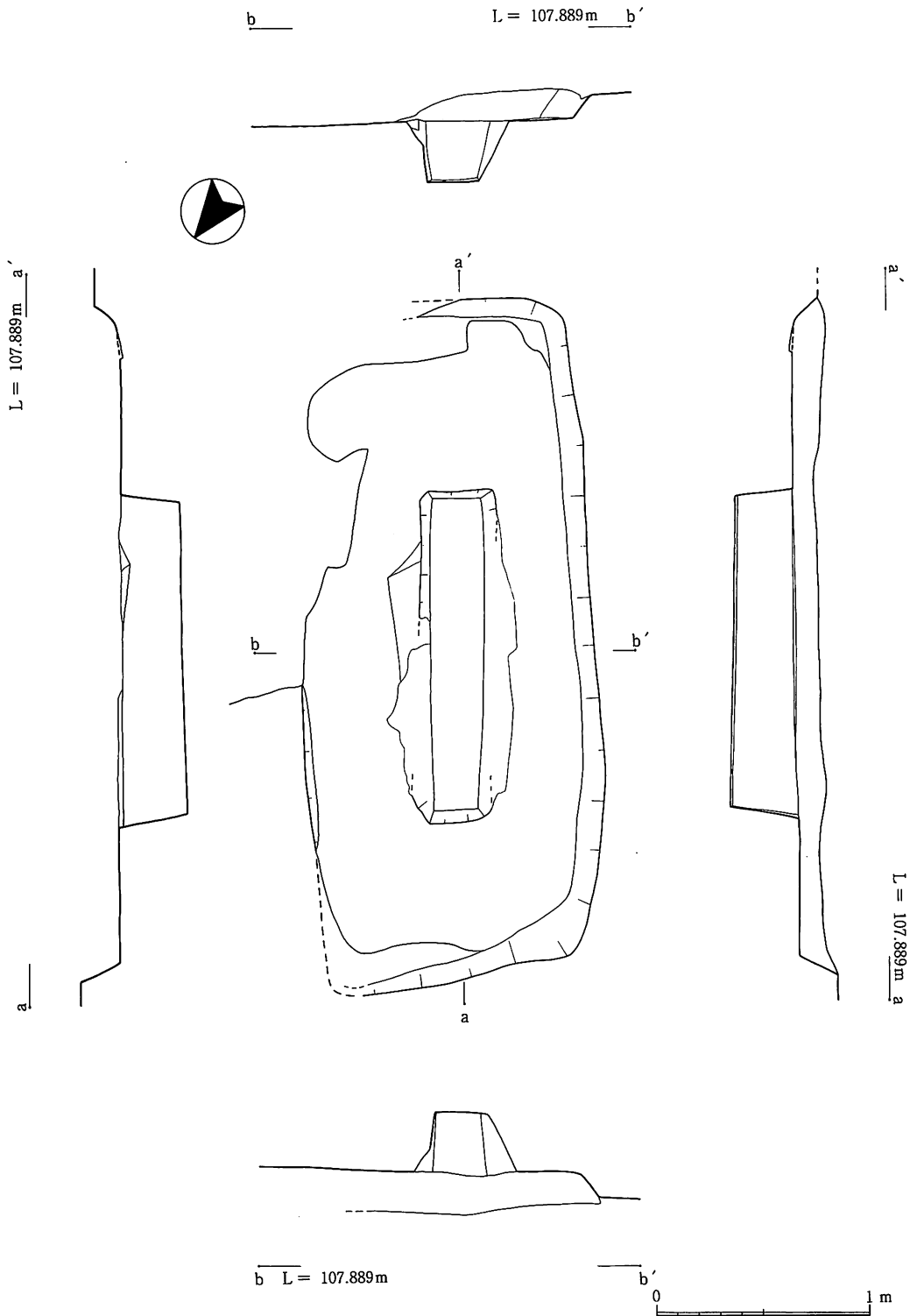
墓壇内には、工事の際の破壊によって流入した土砂以外に埋土はなく、盗掘痕らしきものもなかった。そこで、副葬品の出土を期待したが、精査したにもかかわらず遺物は一つも見つからなかった。本来、墓壇内に副葬品を入れなかったようである。赤色顔料は、大まかに墓壇内を4つに分割し、分析資料として採取した。



第6図 第一主体 人骨出土図



第7図 第一主体 実測図

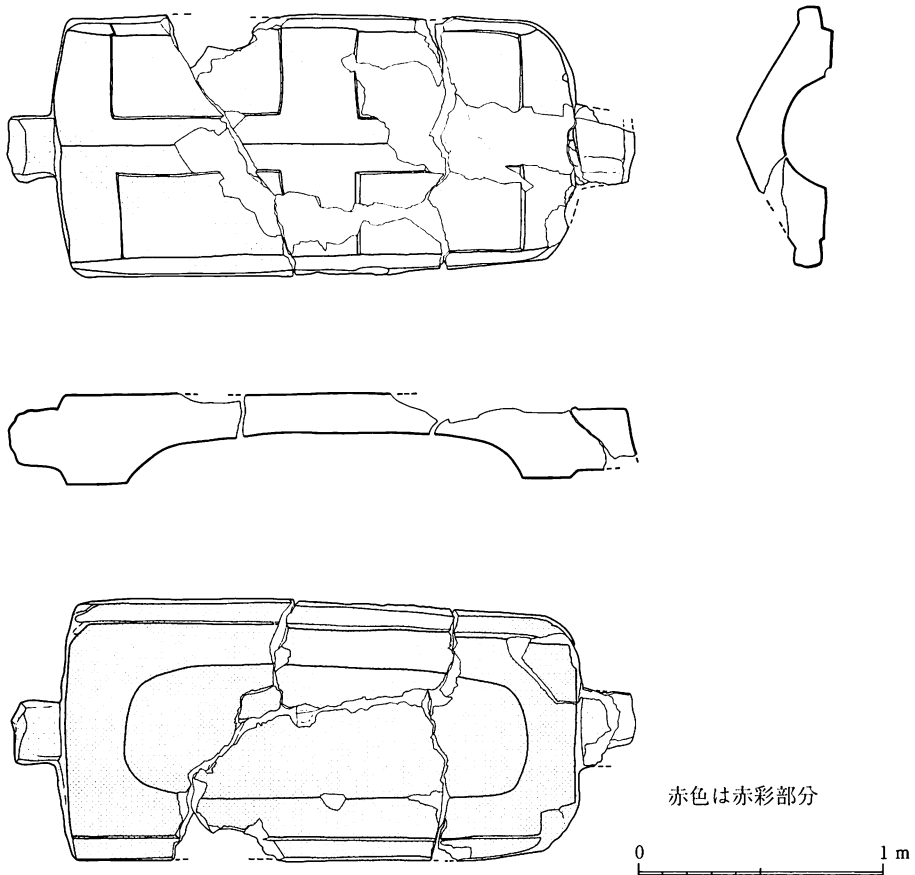


第8図 第一主体 完掘実測図

この墓壙の上に石蓋が乗せられている。しかし、単に乗せるのではなく、粘土を掘り込みの縁に廻らして蓋の重みできっちりと合わさるようにしていた。密封度を高めるためであろう。その後、蓋の周囲に赤色顔料を薄く塗布して粘土でさらに目張りをし、棺を巻くように粘土で覆い、いわゆる「粘土槨」を形成していたようである。墓壙は、粘性を帯びたかなり硬質の地山に掘り込まれていたため、下に支えの石材等の使用は必要ないと判断されたようである。しかし、石蓋の重さに耐えきれず、調査時には、墓壙の上部が内側に迫り出すようにして崩壊しかかっている部分があった。

2. 第一主体の石蓋

石蓋は凝灰岩によって造られている。周辺地域には凝灰岩の露頭が多くみられる。ちなみに



第9図 第一主体 石蓋復元実測図

この古墳の基盤層も凝灰岩である。当地域のものが利用されたかどうかは、石材の鑑定を行っていないので不明である。

この石蓋は重機により既に破損していたが、石材はほとんどそのまま現地に保存されていた。そこで、現地で復元してみた。その平面形は隅丸の長方形で、復元長が2.50m、幅が1.10mである。特に南側におかれていた方は、より丸まり、もう一方よりやや狭くなっている。形態は、天井の稜を一本線で表わした切り妻の家形である。妻にはそれぞれ一つの縄掛け突起が造り出されている。長さがそれぞれ20cmほど、幅が25～30cm、厚さが25cmほどある。石蓋の移動の際、ひとつを縄掛け用として利用したが、十分実用に耐えそうである。

石蓋の外面には4つの長方形の透し状の凹みが掘りこまれている。天井の稜線に近い方が深く、2cmほどである。一方端部に近い方は1cmほどしかない。場所によっては単に沈線化したところもある。長辺が約70cm、短辺が約40cmである。内側は、平坦な面を丁寧な手斧使いで抉り、半長卵形に掘りあげている。長さが1.65m、幅が約0.50m、一番深いところで0.20mある。石蓋は、土壙墓とは形も異なり、大きさも異なっている。また、実際に設置する時ずれがあったようで、内側の平坦面にずれの痕跡が残る。

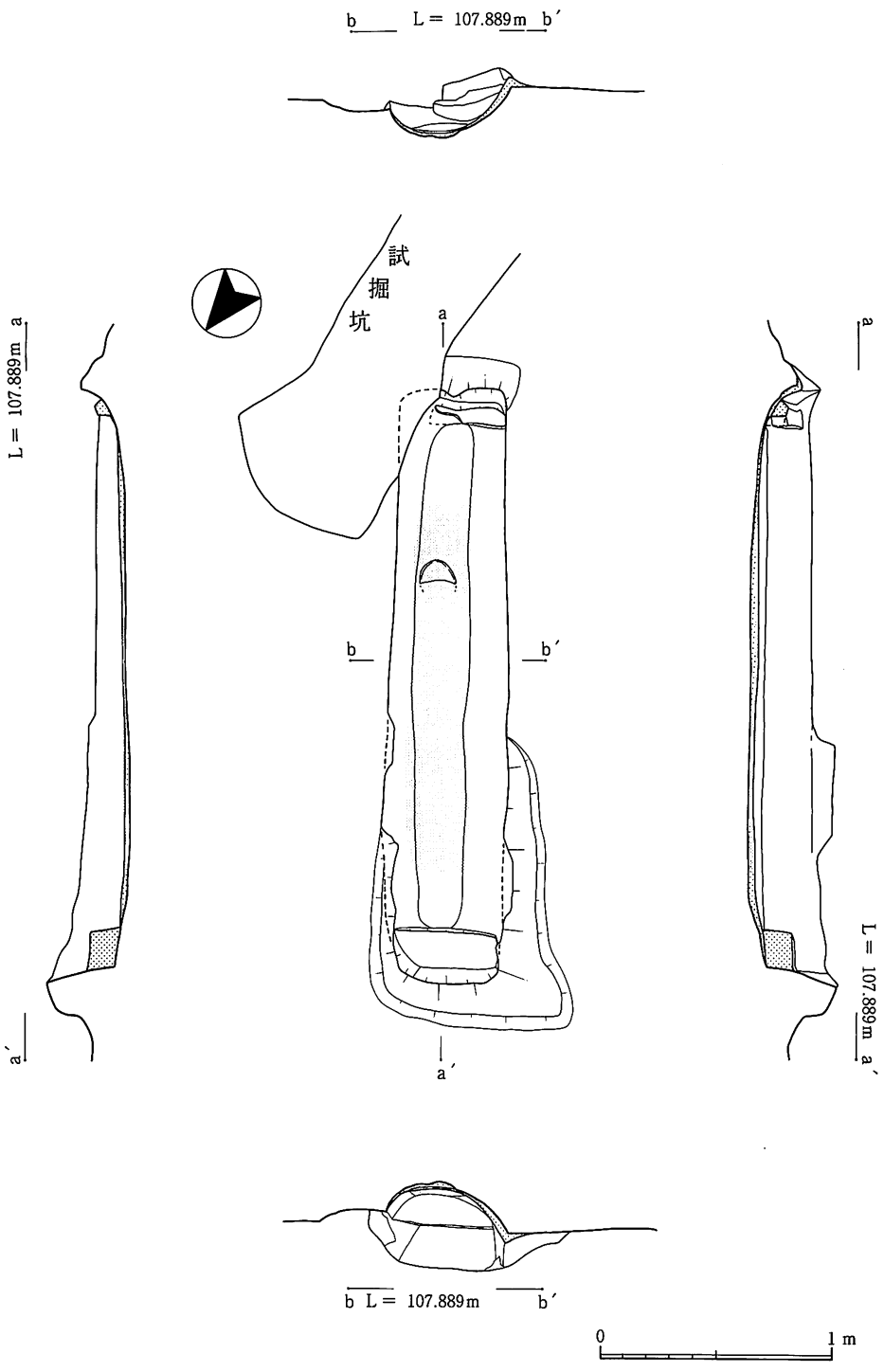
内外面ともに赤色の顔料が塗布されている。特に内側は丁寧に塗布されたようで顔料の残りが良く、鮮やかな赤色であった。さらに塗布した際の刷毛の跡が見て取れる程であった。

3. 第二主体

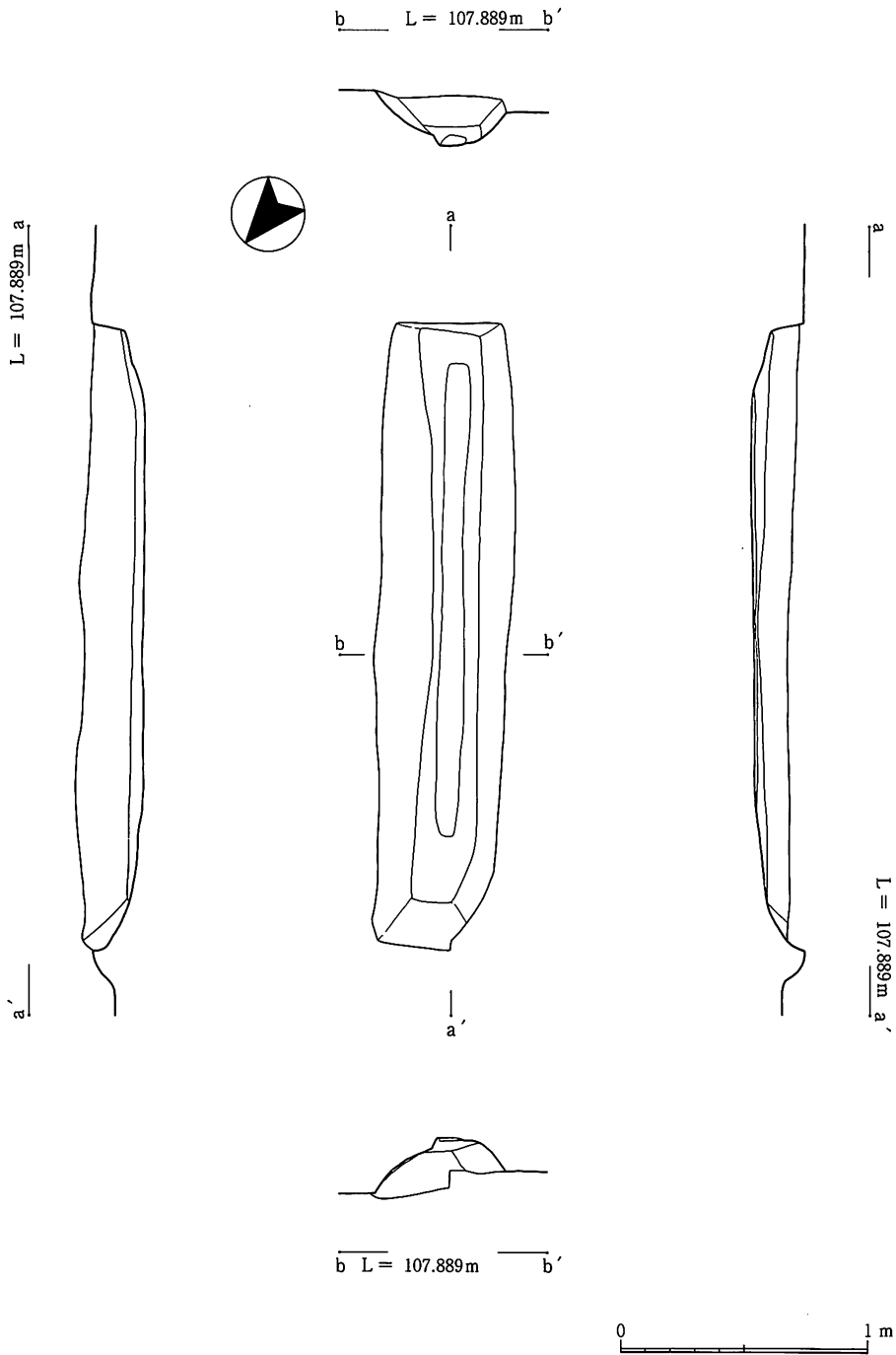
第二主体は、粘土槨の木棺であろう。主軸線は第一主体よりもやや東よりで、 $S-40^{\circ}-E$ である。

第一主体の調査中に、第一段目の掘り込みを確認していると、西側の平坦面に顔料の塗布がさらに続いていた。このため、もう一つの主体があるのではないかと予想のもとに、試掘坑を西側に伸ばした。すると、第一主体の約1m西の地点で浅い落ち込みが確認され、その先に赤色の顔料が薄く塗布された粘土の塊が現われた。そこで、南側へも試掘坑を拡張したところ、粘土槨と思われる長く延びた粘土塊が現われた。また、土層確認のため残っていたベルトからも、これがたしかにもう一つの主体であることが確認された。しかも粘土槨に包まれた木棺の可能性があった。そこで、慎重に崩落していた粘土塊や埋土を取り除いた。取り除く途中で、粘土と粘土との間や埋土との間に赤色顔料が見られ、棺の蓋あたりにも顔料を塗布したのではないかと思われた。

粘土塊や埋没土を取り除いてしまうと、赤色顔料の塗布された半円形のくぼみが現われた。棺自体は朽ちて、土圧によって早くから潰されていたようである。しかし、棺身側は棺材はなかったものの旧状が良く残っていた。また、盗掘痕らしきものもなかった。ただ、試掘に際して、南側の一部が破損していた。あまり粘土に注意が払われていなかったようである。



第10図 第二主体 実測図



第11図 第二主体 完掘実測図

棺内には、頭骸骨の一部と思われる人骨とその他の骨粉があった。頭骸骨とすれば、頭位方向は第一主体と同じく、南東方向となる。四肢骨などは既に朽ちていた。人骨及び骨粉は分析のため、長崎大学に送付した。また、棺内部の顔料についても、分析資料として、採集した。

粘土槨は南北長約2.50m、東西幅0.20mあった。内部には、赤色顔料が1cmほど塗布されていた。底部で確認された顔料の範囲は、南北長1.60m、東西幅0.26mであり、粘土の残存規模とかなり異なる。さらに、調査中に一部取り除いてしまったが、その顔料の分布する範囲の両側面に、棺を押さえるかの様に粘土塊が置かれていた。この粘土塊が木棺の支えとすれば、その大きさは、床面に残っていた赤色顔料の範囲とさほど変わらないようである。

全ての粘土を除去し、地山だけにすると第一主体ほど明確ではないが、10cm未満の深さで棺の周囲に墓壙が掘り込まれていた。掘り込みラインが確認できたところを繋ぐと隅丸方形を呈しており、ほぼ第一主体の一段目の掘り込みと長さ・幅が一致する。さらに第一主体とはほぼ並列している。その中央付近に棺の設置場所として、地山に南北長2.55m、東西幅0.50m、深さ0.25mほどの断面半円形の掘り込みを行っていた。

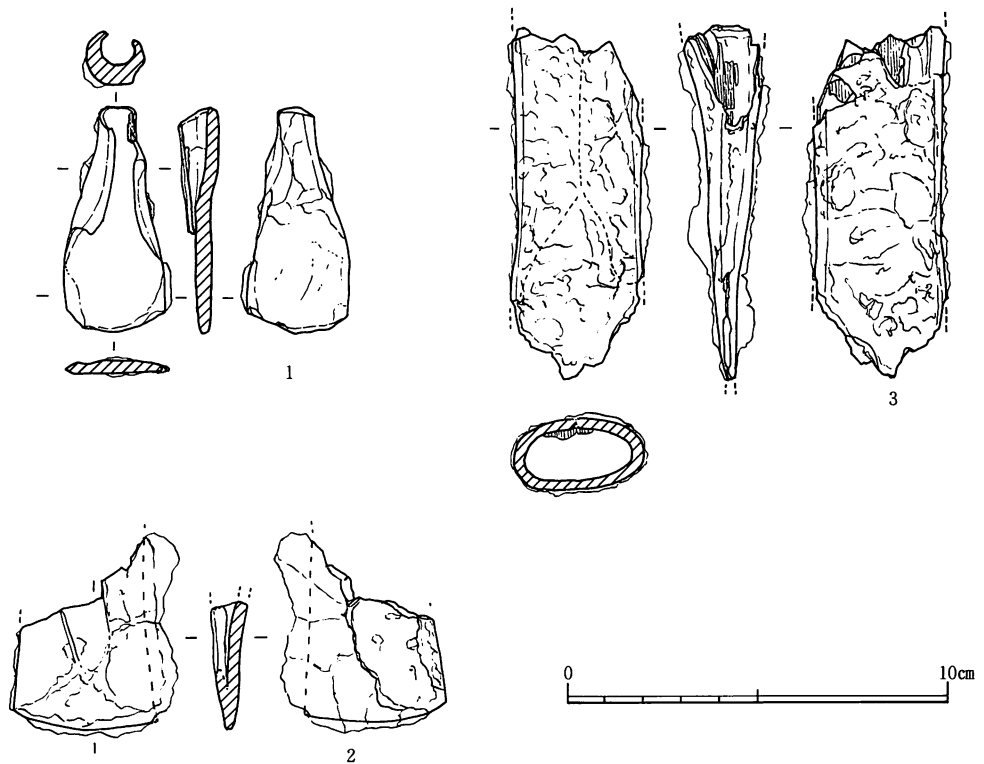
以上のことからそこに木棺があったと仮定すれば、長さ2.55m以内、幅0.50m以内の大きさで、その形状からやはり割竹形木棺が妥当かと思われる。ただ、内部に残る赤色顔料の範囲、粘土塊の様子などから、長さについてはさらに短くなり、1.60mほどになろう。高さについては、明確な想定はできないが、0.50mほどであろうか。さらに断面観察と発掘調査中の所見から設置の手順を考えると、地山を整形し、棺の設置範囲をきめる。その中央に棺座として、浅い掘り込みをする。粘土で棺座を補強し、その上に木棺を置く。赤色顔料を内部に塗布し、遺体をいれて、蓋をした後にさらに顔料を塗布する。粘土で回りを密閉し、槨としたようである。

第二主体の内部に堆積した土はまとめておいて、後でふるって見たが、時期の決め手となる遺物はおろか、一点の出土物もなかった。従って、第一主体とともにその時期判定はできない。

第3節 出土遺物

本古墳の調査では、確実に遺構に伴う遺物の出土はなかった。しかし、鉄器が数点見つっている。何れも、重機によって墳丘が破壊された後の攪乱土中であつたものである。従って、その原位置が明確でないものである。ただ、その攪乱土は第一主体の上の盛り土を破壊した際に形成されたのは確かであるので、第一主体と関係があるものと思われる。鉄器の中には、粘土を抱え込んでいるものがあり、第一主体の石蓋の被覆粘土中に巻き込まれていた可能性がある。

1は、所謂「ヒナ形」鉄斧といわれるもので、ほぼ完形である。長さ5.80cm、重さ20.6gを計る。鉄片を袋状に折り曲げ、ソケット状にしている。その内側には木目が刃部に対して垂直になるような木片が僅かに残り、柄が縦方向に取り付けられていたことをうかがわせる。



第12図 出土遺物実測図

2は、やはり鉄斧の一部と思われる。刃部幅3.50cmの直刃で、刃部からやや上で折返しをしている。残欠であるため全体はつかめないが、やや小振りのものであろう。重さ27.8gをはかる。

3は、器種が良く分からないものである。1、2の鉄斧とはやや異なるようである。袋状に鉄板をまげており、まげた内部には、縦方向の木片が残り、残欠の上から2.5cmの所まで延び、柄が取り付けられていたようである。残存長は9.0cm、重さ66.6gである。

この他に、形状の不明な鉄片が2点ほどあるが、ごく小さいもので図示できなかった。これらの破片と思われる。

また、土器片も墳丘中から十数点出土している。しかし、いずれも細片であり、復元できないものばかりであった。これらの土器片は摩耗しており、この古墳の築造の際に盛り土の中に混入したものと思われる。しかもそれらはほとんどが弥生時代のものであると思われる。周囲の土中からも土器片が採集されるところから、弥生時代の遺跡が周囲にあった可能性がある。

第4章 ま と め

大きく破壊され、消し去られようとしていた古墳であったが、この菊鹿町だけでなく熊本県北部の古墳文化を考える上で貴重な資料を提供してくれた。以下にその概要をまとめる。

・立地について

本古墳の位置する菊鹿盆地は、古墳の多く分布する地域である。しかも内部主体の判明しているものをみると箱式石棺、舟形石棺、堅穴系横口式石室、横穴式石室と大きな差異がある。この内部主体の多様性は、この地域に展開した古墳の時期幅の広さをしめしている。その中にあってこの灰塚古墳は、石蓋土壙墓と木棺墓を内部主体として持つ特異な存在である。これは、当地域の古墳の変遷を追う上で重要な位置をしめよう。この古墳の位置する木野川の左岸では、これまで横穴式石室のものしか知られておらず、今のところこの地域で最古のものである。未調査の銭亀塚古墳群の内部主体を考える上で大きな参考となろう。

・墳丘について

破壊がひどいため、全貌はつかめなかった。しかし、盛土によって墳丘が作られていること、部分的に地山の削り出しがあるのではないかとということが分かった。そして、墳丘には、葺石が施されていた。墳形は、墳丘の裾を確認できなかったため不明である。ただ、葺石の分布状況から円墳であったのではないかと推定される。

・主体部について

主体部には、石蓋土壙墓と木棺墓があった。何れも粘土槨を持っていた。石蓋土壙墓は丁寧に仕上げられた土壙を棺として、一体の若者の遺体をいれた様である。他に一つの熟年の歯があったが、これは葬送儀礼に関するものかもしれない。また、赤色顔料が蓋石はもとより内部にも塗布され、特に床面には厚く撒かれていた。顔料は大部分がベンガラであったが、この石蓋土壙墓の遺体頭部付近には水銀朱が認められた。木棺では、棺材は既に朽ちていたが、被覆粘土に残された棺の痕跡と顔料の広がりなどから、小型の割竹形木棺の可能性が強い。これにも熟年の人骨が僅かに残り、顔料の塗布が認められた。この二つの主体はほぼ平行に並び、墳丘の状況等よりほぼ同時に埋葬されたものと思われる。ただ、主になる被葬者は石蓋土壙墓の人物であろう。

・遺物について

未盗掘の古墳であったにもかかわらず、棺内からの副葬品など遺物の出土はなかった。ただ、工事に際しての攪乱土中より鉄斧等の鉄器が出土している。棺外に副葬されたものであろう。

・年代について

この古墳は、出土遺物が極端に少なく、しかも土器等の時代のメルクマールとなるものの出土はなかったため、年代を決定することはできなかった。

このような成果から、灰塚古墳の特徴として捉えなおすと次のようになろう。

1. 墳丘に葺石がある。
2. 内部主体に石蓋土壙墓と木棺墓の2つを持つ。
3. いずれも粘土槨で覆われる。
4. 副葬品が極端に少ない。
5. 石蓋土壙墓の石蓋は舟形もしくは家形石棺の棺蓋そのものである。
6. 石蓋には、装飾が施されている。
7. 棺内には人骨がそれぞれに一体ずつ入る。
8. どちらにも赤色顔料が塗布されていた。特に石蓋土壙墓の内部の赤色顔料は、大部分がベンガラであるが、頭部付近は水銀朱を塗布する。

このうちまず、石蓋土壙墓について考えてみる。石蓋土壙墓という形態の墓形式は弥生時代からあり、その構造上の大きさから未成年に対する墓地形態ではないかともいわれている。熊本県内での石蓋土壙墓の出土は数遺跡で確認されている。本古墳の近くでは、山鹿市小原字竜宮の竜宮石棺群、字中尾の中尾石棺群、津袋大塚古墳の周囲の石棺群のものなどがある¹⁾。しかし、この古墳のような蓋石の形態を持つものの出土は非常に稀である。最近調査された宇土市の西潤野古墳群の1号墳で石蓋土壙墓が内部主体として確認されている²⁾。この古墳における石蓋土壙墓は、本古墳と同じ屋根形のものであった。ただ、本古墳と異なる点として、明確な盛土を行なう墳丘を持たず、石棺などと共に群をなすことである。調査を担当された高木恭二氏によれば、この古墳は弥生時代の墓制の伝統を引き継ぐものであろうとのことである。また、先にあげた近くの古墳もそうであるが、いずれも他の箱式石棺墓などと伴い、単独に墳丘を持つ古墳の主体部ではない。とすれば、本古墳における石蓋土壙墓の在り方は非常に特殊なものである。

熊本県の弥生時代の石棺墓の調査はほとんどなく、県内で箱式石棺墓と石蓋土壙墓との関係を追うのは無理がある。そこで、地域的に離れているが、福岡県を中心とする北部九州の状況を参考にすると、石蓋土壙墓の初現は、弥生時代後期前半とされるという。その後、古墳時代では6世紀初めまで続くようである。弥生時代のものは、群集墳の中の一つとされ、古墳時代に入ると意味合いがやや異なるようになり、他の古墳に従属するようになる。また、小児棺も増えるという。ただ、石蓋土壙墓でも中心主体となるものはいくつかある。このような状況を本県のものと比較してみると弥生時代は不明であるが、古墳時代になってからはよく似た傾向があるのではないかとと思われる³⁾。

次に、石蓋の造りはどのように捉えられるか、他の古墳と形態的な比較を試みよう。この石蓋の形態は屋根形を呈し、これに類する形態の蓋石としては舟形石棺もしくは家形石棺のものがあげられる。本古墳の位置する菊鹿盆地から玉名にかけての地域の菊池川流域は、石棺の

一大生産地兼分布地域である⁴⁾。当然この形態に近い石蓋はいくつかあげられる。特に石蓋に透し窓状の四角形の彫り込みを入れる装飾方法に視点をすえてみよう。非常によく似たものとして玉名郡天水町部田見城の平の経塚古墳がある。この古墳は、直径45m、高さ7mの円墳で、舟形石棺を直葬していた。棺身には石枕が彫り出されていた。石蓋の棟は平で、切り妻の家形に近い構造である。全長2.74m、幅約0.70mを計る。副葬品も豊富で、時期は4世紀末から5世紀初めとされている。また、鹿本郡鹿央町持松の持松塚原古墳は直径約20m、高さ約4mの円墳である。内部主体は舟形石棺か家形石棺であろうとされている。棺蓋のみが確認され、主軸を東西方向にとり、幅1.68mの切り妻形で妻に巨大な突起を二つ持ち、棺身にも二つ持つ。その外面に長方形の透しが3つずつある。部分的なため全体は不明である。同じく鹿本郡鹿央町持松の持松3号墳は、家形石棺である。棺蓋は長さが2.50m、幅0.49mを計り、透しがある。時期は6世紀とされている。墳丘には葺石があり、かなり丁寧な作りである。このことから、この地域の首長に連なる者の墓とみられている⁵⁾。さらに近隣では、位置と環境でもふれた津袋古墳群の一つである五社宮古墳のもの、後に報告する尾迫古墳のものがある。いずれも破片のみで全体はつかめないが、外面に透し状の装飾を施す点でよく似ている。このように屋根形の蓋石に装飾を施したものは舟形石棺や家形石棺の中にあり、しかもごく稀なものである。中でも経塚古墳のものが透しの数などから見ると本古墳のものによく似ている。規格がかなり異なり、地理的にやや遠いが、同じ菊池川流域であり単なる偶然で似通ったものではないと思われる。また、蓋石自体の特徴は縄掛け突起の在り方と、側辺部のみに平坦面を造る点から、家形石棺よりも舟形石棺の蓋石の形態に含まれよう。周辺地域の舟形石棺の分布を考えあわせても妥当と思われる。当時この菊池川流域に共通する技法を持つ集団が存在したことをうかがわせる。

今まで第一主体を中心に考えてきた。では、第二主体の木棺墓の在り方はどうであろうか。複数の内部主体が見られる場合、追葬であることが多い。しかし、本古墳では調査結果から、この木棺墓は第一主体と同時か第一主体密封後の墳丘築造時に埋葬されたと考えている。後者とすれば、木棺墓は従的なものの可能性がある。副葬品が全く無かったこともそれを裏付けるようである。第二主体は割竹形木棺として報告しているが、この形式の棺としては小型の部類に入る。割竹形木棺は県内でも数遺跡で確認されている。しかし、本古墳のように直葬のものは、稀である。今、これと比較しうる資料を持ちえていないのではっきりとは言えないが、これもまた特殊ではなからうか。

次に被葬者であるが、残存していた人骨の鑑定結果から第一主体に小児（十二歳）が一体と、成人の歯が一つあり、第二主体では熟年のものが一体であった。第一主体の石蓋土壙墓に小児骨があったことは、中心的な被葬者が小児であったことを示すものと考えられる。しかも、上で見たように葬送の方法は非常に丁寧なものである。このことは、被葬者が子供であってもか

なりな身分のものであったことを示唆している。とすれば、この地域の首長に連なる者であった可能性がある。また、第二主体の主は、第一主体の関係者ではないかと思われる。

最後に本古墳の年代を推定してみよう。先に述べたように第一主体の石蓋土壙墓の蓋石の形態が舟形石棺と関係付けられるとすれば、舟形石棺の棺蓋の形態的变化を追うことで年代が推定できると思われる。中でも菊池川流域の舟形石棺の形態変化はすでに編年案がいくつか考えられている。それらを参考にしてみる。棺蓋は屋根形を呈し、両小口に縄掛け突起を一つずつ造る。棺身は時期的に変化していくようである。棺身底が丸底気味から平底へ、棺内では石枕が消失の方向へと向かうようである。また、突帯自体も形骸化していくという⁹⁾。第一主体は、土壙墓であるため棺底は比較できない。しかし、棺内には枕を意識した赤色顔料の高まりがある。また、蓋石の突帯もしっかりしている。このようなことから、石蓋土壙墓の蓋石はやや古手のものに位置付けてもよいとおもわれる。第二主体が割竹形木棺である点も勘案して、灰塚古墳の築造は、5世紀初頭と一応考えておく。

末尾ではあるが、調査参加者を初め、菊鹿町役場・教育委員会、鹿本事務所など、工事担当の青木工務店及びその他の調査協力者の方々に調査員一同深く感謝の意を表すものである。

註

- 1) 原口長之 「第2節 古墳文化」『山鹿市史』 1985年
- 2) 高木恭二・木下洋介 「宇土半島基部古墳群」 宇土市教育委員会 1989年
- 3) 吉留秀敏 「九州の割竹形木棺」『古文化談叢 20(中)』九州文化研究会 1989年
吉留秀敏 「北部九州の前期古墳と埋葬主体」『考古学研究』 1990年
- 4) 高木恭二 「九州の舟形石棺」『東アジアの考古と歴史』下 同朋舎 1987年
- 5) 高木正文ほか 「熊本県装飾古墳総合調査報告書」 熊本県教育委員会 1984年
- 6) 高木恭二 「九州の舟形石棺」『東アジアの考古と歴史』下 同朋舎 1987年
高木恭二 「2九州 2西部(佐賀・熊本)」『古墳時代の研究 10』雄山閣 1990年

版 圖



灰塚古墳遠景（調査前、北東より）



灰塚古墳遠景（調査後、南より）

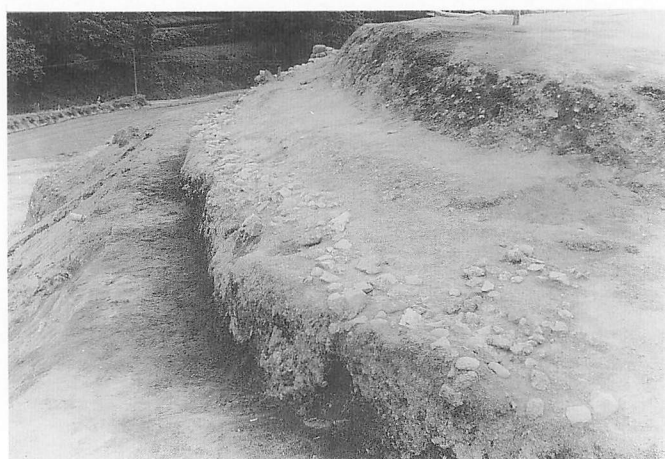
図版 2



葺石出土状況
(A地点、西より)



葺石出土状況
(B地点、南より)



葺石出土状況
(C地点、北西より)

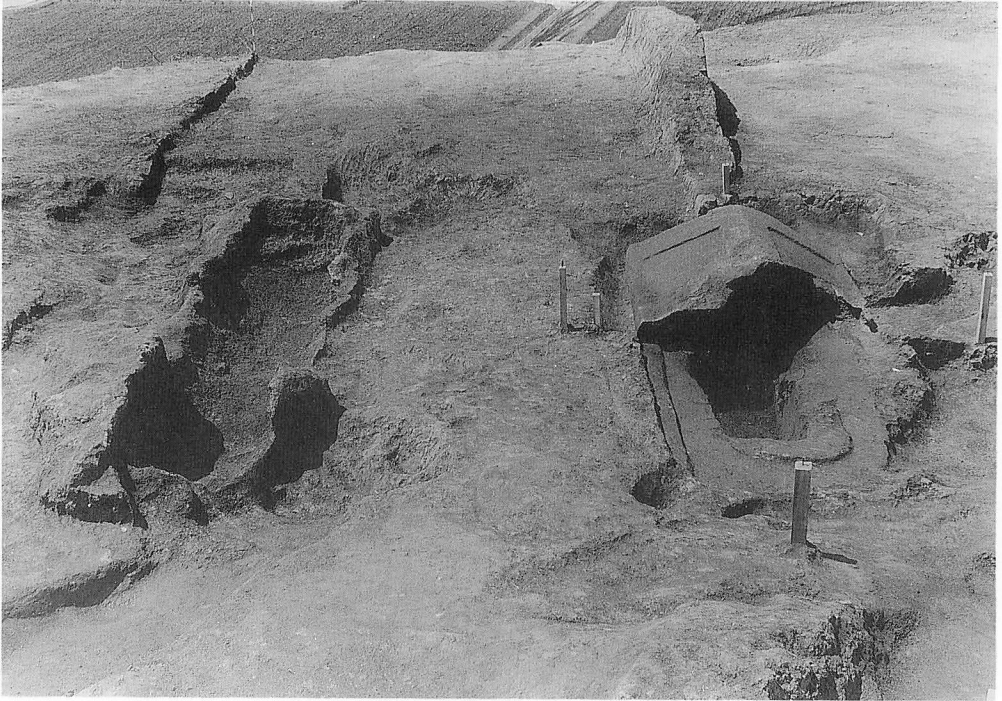


墳丘盛土状況 (A-A'、南より)



墳丘盛土状況 (B-B'、東より)

図版 4

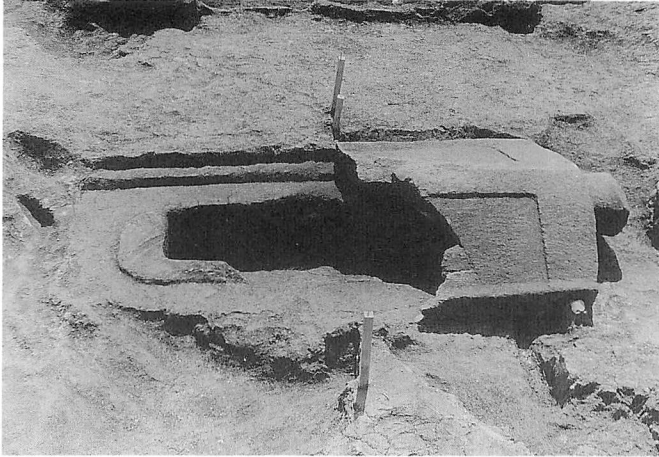


第一主体、第二主体並列状況（南東より）

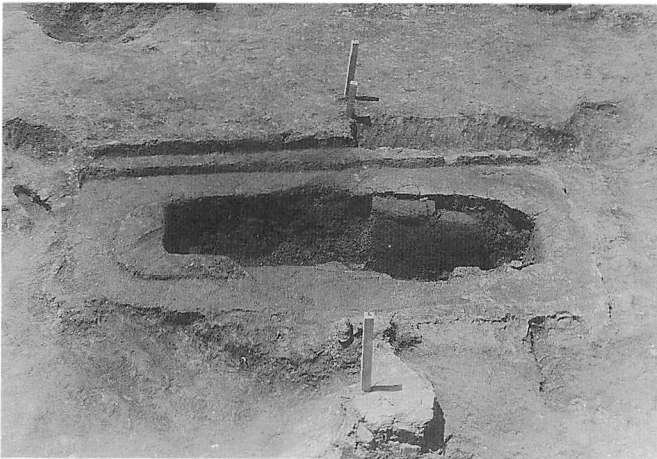


同上（第一主体蓋石除去後、南東より）

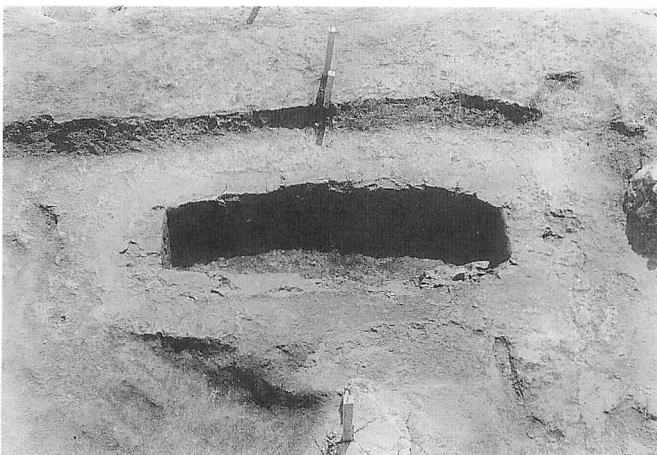
図版 5



第一主体
(石蓋除去前、東より)

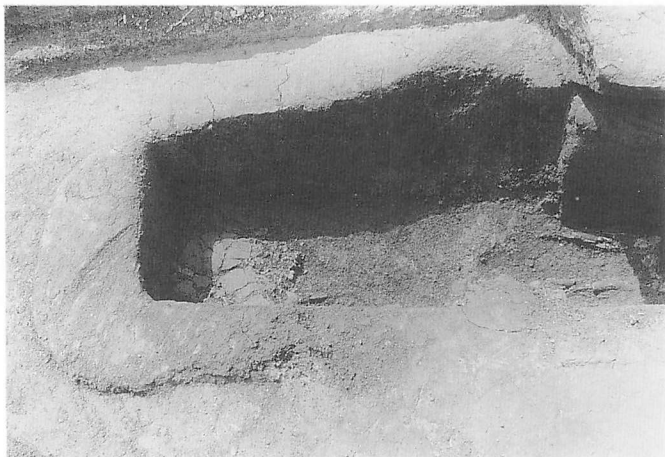


同上
(石蓋除去前、東より)



同上
(掘り込み確認状況、東より)

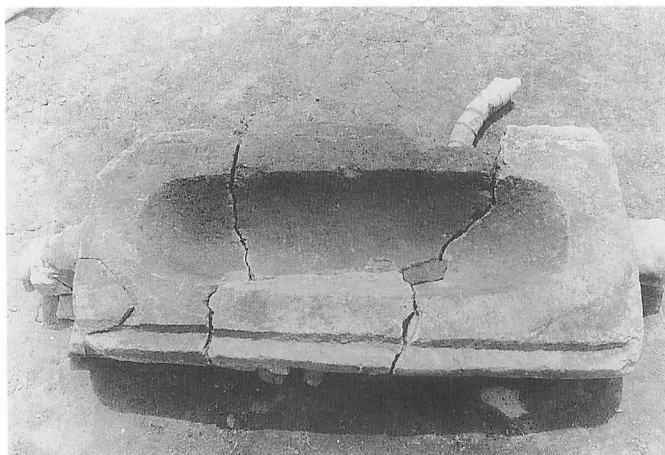
図版 6



第一主体人骨出土状況
(東より)



第一主体石蓋復元状況
(外面)

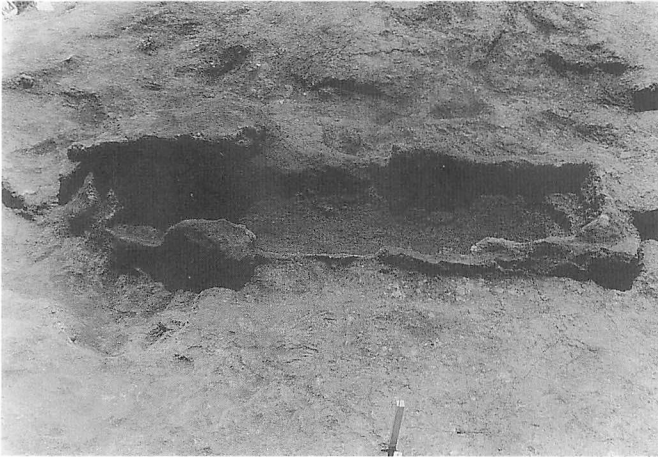


同上
(内面)

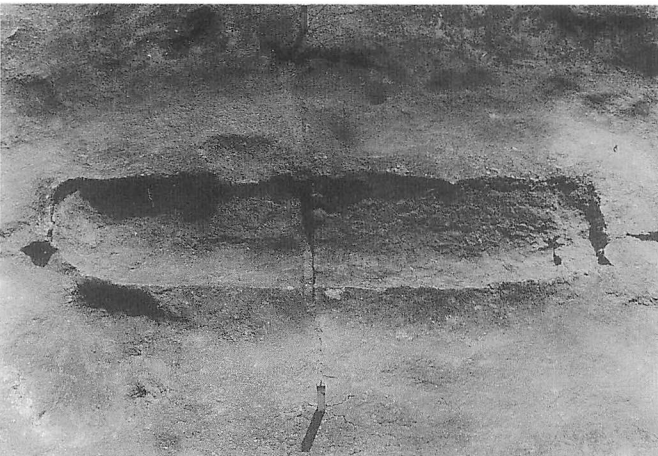
図版 7



第一主体
石蓋移転復元状況

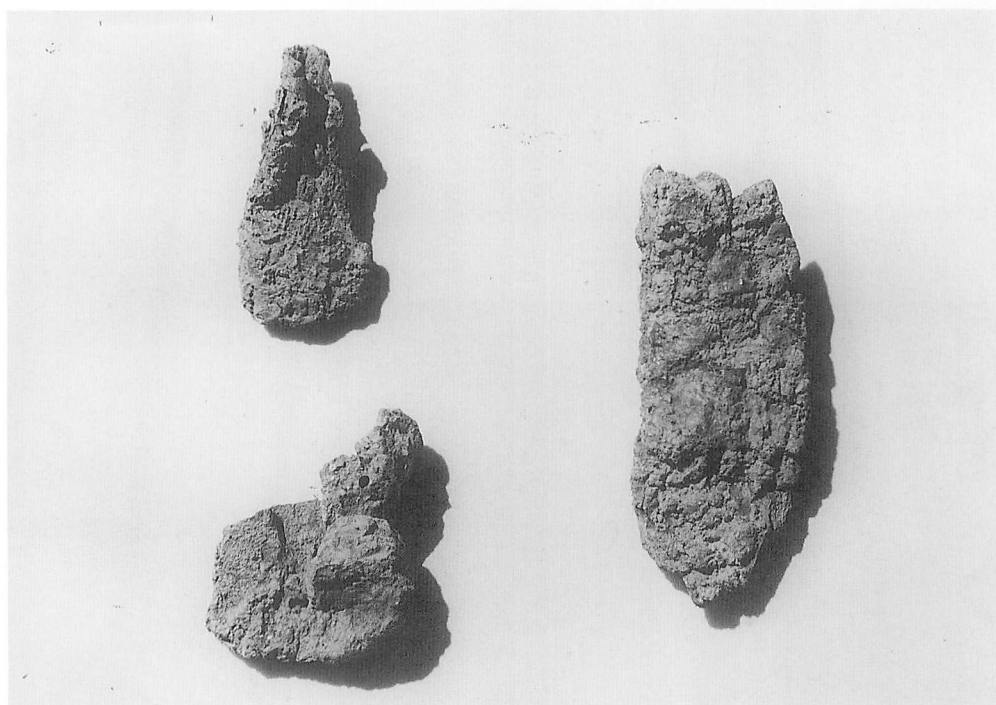
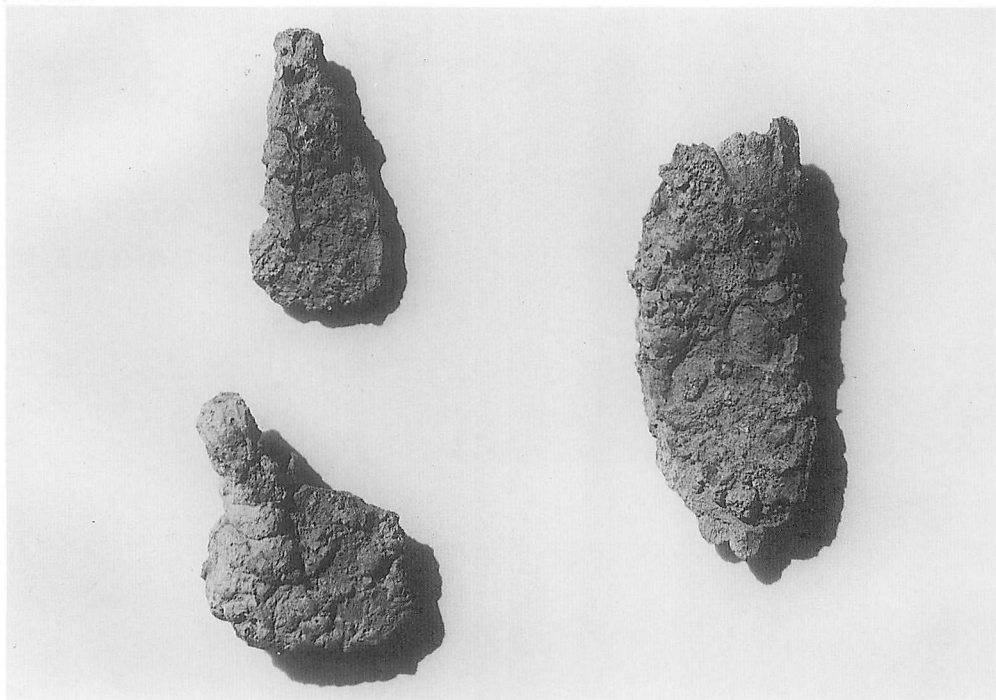


第二主体確認状況



第二主体完掘状況

图版 8



出土遺物（表・裏）

付 篇

1. 灰塚出土の赤色顔料について

戸高真知子

2. 熊本県菊鹿町灰塚古墳出土の人骨

松下孝幸・分部哲秋・佐伯和信・小山田常一・折原義行

3. 熊本県鹿本郡菊鹿町尾迫古墳調査報告

池田栄史

灰塚古墳出土の赤色顔料について

戸高 真知子*

灰塚古墳では、第1・2主体部内より多量の赤色顔料が出土している。筆者は、その採取試料を預かり受け、研究の機会をいただいた。本稿では、その分析結果と所見について報告する。

試料の採取位置

赤色顔料は、第1主体部の石蓋土壙墓では墓壙内全面及び石蓋内外面に、第2主体部の割り竹形木棺墓では、棺底と思われる部分全面にそれぞれ塗布されていた（赤色顔料の状態については、p18～p25に詳しく記載されている）。試料は、調査者が両主体部の遺体の頭部、胸部、腰部、脚部にあたる部分、合計8箇所採取したもので、土砂や骨片等が混入した状態であった。

顔料の同定

遺跡出土の赤色顔料については、まず第一にそれが何であるかを明らかにする必要がある。ひとくちに赤色顔料といっても各々材質の違いが見られるからである。

本古墳が造営された時代に用いられていた赤色の顔料には、硫化水銀 HgS の天然鉱物である辰砂を粉碎・精製した朱（水銀朱）と、赤色が酸化第2鉄 Fe_2O_3 に由来し、鉄分を多く含む土や鉱物を原料にしたと考えられているベンガラ（丹・に）の2種類がある。その他、鉛を人為的に加工した鉛丹 Pb_3O_4 も『魏志倭人伝』記載の卑弥呼へ下賜された品々の中に登場しており、その出土が期待されるが、現在までのところ鉛丹の出土例はない。

試料が上記の顔料の、いずれに該当するかを調べるにはいくつかの方法があるが¹⁾、ここでは蛍光X線分析法により検出された元素、すなわちHg、Fe、Pbのいずれか、により顔料の同定を行なった。また、その結果を確認するとともに同定の根拠を補強するため、試料中の結晶物質を検出するX線回折分析の結果も参考にした。

分析に際しては、採取試料中から顔料本来の材質を保持していると見られる部分（顔料塊や赤色の最も濃い部分）を選別して分析に供した。各分析の条件とチャートの一部は図1・2に示し、分析結果と顔料の同定については表1にまとめた。

* 宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財調査員

表1. 灰塚古墳出土赤色顔料の各試料と分析結果

採取位置	採取試料の状態・重量	色調* (乾燥時)	蛍光X線分析検出元素	顔料の種類
			回折分析検出結晶鉱物	
第1主体部	頭部 混入物比較的少ない。 ケシ粒大～径8mmの顔 料塊含む。0.96kg	7.5R 3/6 色票より 赤味強	水銀Hg・鉄Fe	朱 ベンガラ
			辰砂HgS・赤鉄鉱Fe ₂ O ₃	
	胸部 骨片・土砂・白色粘土 塊が混じる。0.70kg	〃	水銀Hg・鉄Fe	朱 ベンガラ
			辰砂HgS・赤鉄鉱Fe ₂ O ₃	
腰部 〃 0.61kg	〃	鉄Fe	ベンガラ	
		赤鉄鉱Fe ₂ O ₃		
脚部 〃 0.70kg	7.5R 3.5/6	鉄Fe 赤鉄鉱Fe ₂ O ₃	ベンガラ	
第2主体部	頭部 水分を多く含む粘土状。 土砂・白色粘土塊を含 む。0.85kg	10R 3.5～4/6	鉄Fe	ベンガラ
			赤鉄鉱Fe ₂ O ₃	
	胸部 〃 0.69kg	10R 4/6	鉄Fe	ベンガラ
			赤鉄鉱Fe ₂ O ₃	
腰部 〃 0.55kg	10R 4/6	鉄Fe	ベンガラ	
		赤鉄鉱Fe ₂ O ₃		
脚部 〃 0.71kg	10R 3.5～4/6	鉄Fe 赤鉄鉱Fe ₂ O ₃	ベンガラ	

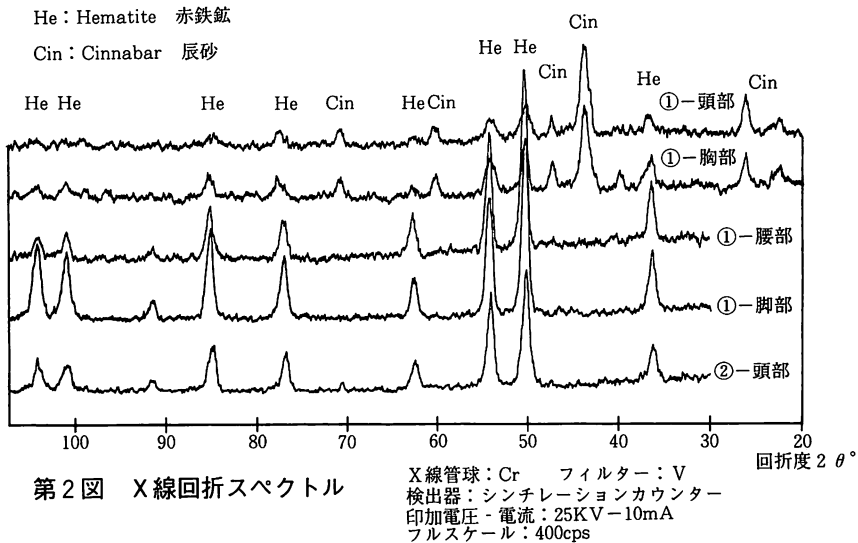
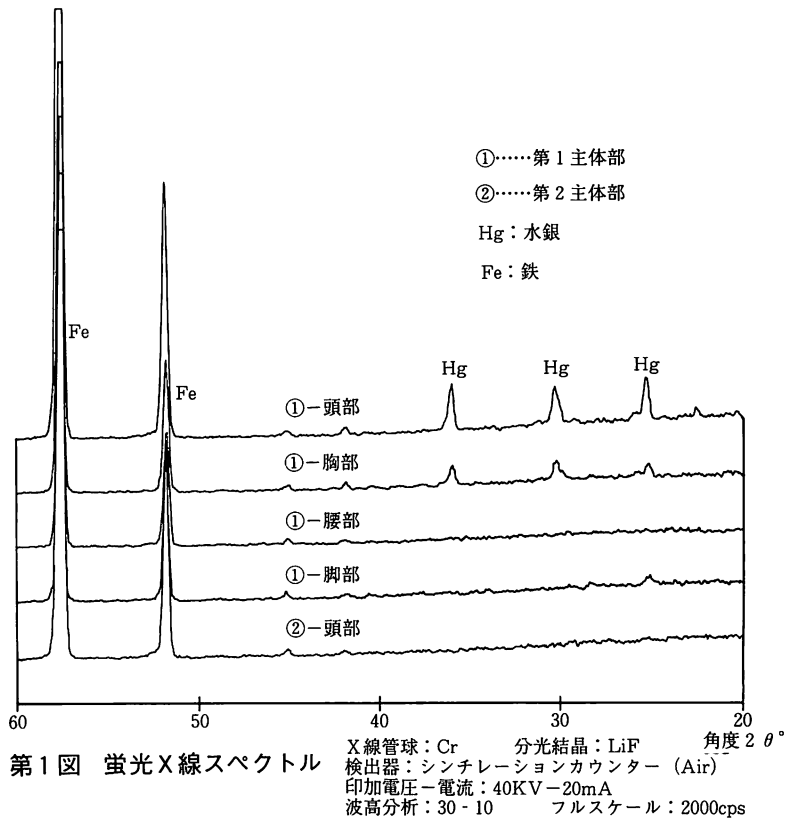
* 色調は、70℃×3時間乾燥した各試料を日本色研事業(株)発行「新版標準土色帖」の色票と照合し、該当色票のマンスセル表色法による記号を表示している。

顔料の顕微鏡観察

X線機器の分析結果による顔料の同定と合わせ、光学顕微鏡を用いて顔料粒子の観察を行なった(40～200倍)。検鏡には分析試料と同様に選別した試料を用いた。

第1主体部の頭部及び胸部の試料では、分析結果に呼応して微細なベンガラ粒子の中に朱の粒子(赤色透明、六方晶系の結晶形、瑠璃光沢)が観察された(図版1・2)²⁾。粒子の大きさは若干不揃いで、量的には検出ピークの高さに対応して頭部の試料中により多く見られた。頭部の採取試料中に混じていた骨片を観察したところ、表面には朱の粒子が多く付着しており、朱が塗布されていたことが窺える(図版3)。これらのことは、従来確認されてきた朱とベンガラの使い分け—遺体の頭胸部に朱、その他の部分または全体にベンガラを用いる—を示していると考えられる。同じ第1主体部の腰部の試料では、蛍光X線分析のチャートにHgらしきピークがわずかに見られるが、検鏡した試料には、脚部の試料と同様ベンガラの粒子のみ観察された。腰部の採取試料の全てを検鏡するとしたら、朱の粒子を発見する可能性があると思われるが、いずれにせよ頭胸部に塗布あるいは散布した朱がたまたま混じた程度の事象によるものであろう。第2主体部の試料では、どの部位のものも分析結果の通り朱の粒子は観察されなかった。

遺跡出土のベンガラは、検鏡による所見上、パイプ状の粒子を含むものと含まないものの2者に大別されるが³⁾、本古墳の試料では第1・2主体部とも後者である。本古墳に使用されたベンガラの原料や製造方法については、それらを確実に調査する方法が未だ確立されていない



現在、残念ながら深く言及することができない。以下、所見と、非科学的ではあるが経験的に見た顔料の印象を述べる。

第1主体部のベンガラ粒子は大きさが均一で光沢があり、やや透明感のある印象を受ける(図版1)。この特徴は、赤鉄鉱の微粉末(図版5・6)や、鉄分を多く含む鉱物を焼成したのち粉碎・水ひした日本画顔料「岱赭」の微細なものに似ている。鉱物を原料としている可能性が高いと思われる。

第2主体部のベンガラは、粒子は微細であるが不揃いな印象があり、不純物も多く含んでいる(図版4)。これらの採取試料は全て同質の淡橙色の粘土状の物質であり、これが顔料本来の状態なのか(赤みの強い粘土をそのまま用いているのか)、あるいは粘土にベンガラ(もっと赤色の濃いもの)を練り交せているのか判断し難い。肉眼観察では赤色の色調にあまりムラが見られないので前者と思われるが、これを科学的に検証する方法のない限り、顕微鏡下で観察される粒子を全てベンガラの粒子と見てよいのか、粘土粒子も混じていると見るかについては、粒子の細かさと相まって、決断に困惑するところである。

以上、分析と顕微鏡観察の結果について報告したが、赤色顔料、とくにベンガラについては不明な点が多く、今後の研究成果に期待するところが大きい。また、遺物である赤色顔料を考古学的な資料として生かすには、その材質や出自を明らかにするだけでなく、多くの遺跡出土試料について時間的・空間的に比較・検討し、歴史的な情報を引き出す努力をしていく必要がある。

最後になったが、X線機器による分析の測定作業は、宮内庁正倉院事務所 成瀬正和氏にご多忙中にもかかわらずお引受けいただいた。ここに記してご厚心に感謝いたします。

註

1) 湿式の化学分析とX線機器による分析(蛍光X線分析やX線回折分析など)があるが、試料の汚染や破壊を避けたい場合は後者を選択し、含有成分の定量を目的とする場合は前者、あるいは後者でも定量可能な機器を選択して分析する。

2) 本田光子氏は、顕微鏡下の遺跡出土赤色顔料について、豊富な観察経験にもとづき「朱とベンガラは、両者の微粒子が混在している場合を除き、粒子の形状から両者を容易に判別することができる」と述べている。氏は遺跡出土の朱について、その粒子径の計測を継続して行っており、蓄積されたデータをもとに朱の編年を試みている。

参考文献

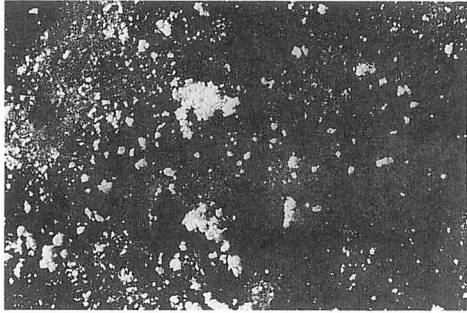
本田光子 「墳墓出土の赤色顔料小考」『肥後考古』第6号 肥後考古学会 1987年

本田光子 「弥生時代の墳墓出土赤色顔料」『九州考古学』第62号 九州考古学会 1988年

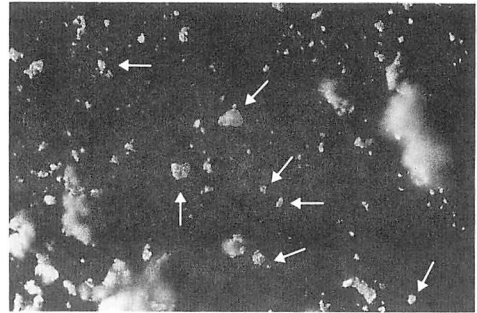
3) パイプ状の粒子は、その特異な形状から特殊な条件下で生成したものと思われるが、現在のところ全貌はあきらかでない。特定の原料あるいは特定の製造方法に起因する可能性も考えられる。

戸高真知子 「赤い供物・朱玉」『えとのす』第31号 新日本教育図書 1986年

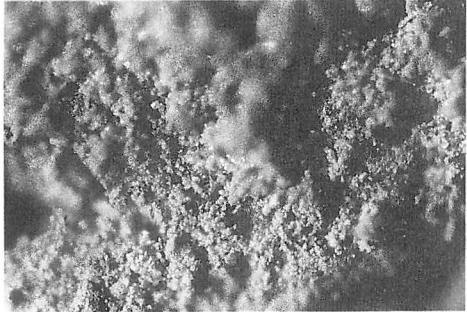
図 版



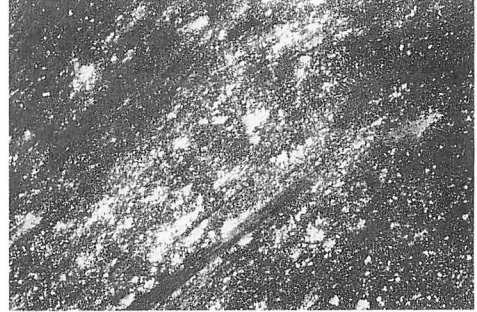
1. 第1主体部 頭部 ×40 (観察倍率。以下同)
ベンガラの微粒子とその凝集した団塊、朱の
粗い粒子が混在している。



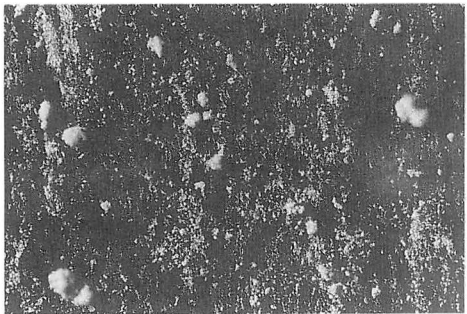
2. 第1主体部 頭部 ×100
矢印は朱の粒子



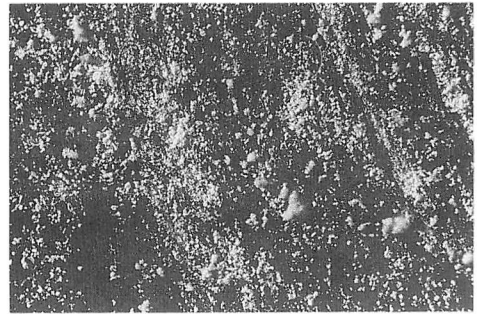
3. 第1主体部 頭部 ×100
頭骨片の表面 モノクロームのためわかり
にくいですが、輝く朱の粒子が多く付着している。



4. 第2主体部 腰部 ×40
ベンガラの粒子



5. 赤鉄鉱 粉末 ×40



6. 赤鉄鉱 粉末 ×100

熊本県菊鹿町灰塚古墳出土の人骨

分部哲秋*・佐伯和信*・松下孝幸*・小山田常一**・折原義行*

【キーワード】：熊本県菊鹿町、古墳時代人骨、石蓋土壙墓、保存不良、小児骨

はじめに

熊本県鹿本郡菊鹿町大字池永字池田に所在する灰塚古墳は圃場整備事業に伴って1989年に発見された古墳である。内部主体の1つである石蓋土壙墓は工事によって半壊状態になっていたために、その内部に残存していた人骨もつぶれており、人骨の取上げも容易ではなかった。

熊本県の古墳時代人骨の報告例には、天草の妻鼻墳墓群（北條、1957）、菊池郡七城町小野崎（北條、1969）、同じく瀬戸口横穴墓（松下・他、1989）、西合志町のハヤマ塚（北條・他、1969）、城南町の丸尾5号墳（内藤、1975）、宇土市の向野田（北條、1978、HOJO, 1982）、同じく城2号墳（永井、1982）、三角町の小田良（北條、1979）、八代市の清水1号古墳（内藤・他、1980）、菊水町の江田大久保（北條、1983）、益城町の福原横穴墓群（松下・他、1985）、玉名市小路石棺（松下、1985）、熊本市の古城横穴墓群（松下孝幸・他、1985）、鹿本町の津袋大塚東側1号石棺（松下・他、1986）、山鹿市の湯の口横穴墓群（松下・他、1986、1988）、中央町の四十八塚5号墳（松下・他、1989）などから出土した古墳人の例がある。

本例は県北に位置する鹿本郡菊鹿町から出土した古墳時代人骨で、後述しているように残存量が多かったのは未成人骨で、保存状態は著しく悪かったので、その特徴を明確にすることはできなかった。残存していた人骨の状態や推測できた年令などを報告しておきたい。

資料と方法

本遺跡から出土した古墳時代人骨は合計3体で、表1に示すとおり、第1主体から出土したものは1体分の人骨とこれとは別個体の下顎の右側側切歯が1本である。この遊離歯の存在は、この石棺にもともと2体が埋葬されていたことを物語っているか、あるいは被葬者とともにこの1本の歯が副葬されたことを示唆しているのかは定かではないが、別個体の遊離歯が1本だけしか認められないことは後者の可能性が強いように思われる。また、第2主体からは性別不明の1体分の熟年骨が検出された。なお、各人骨の性別・年令は表1のとおりである。

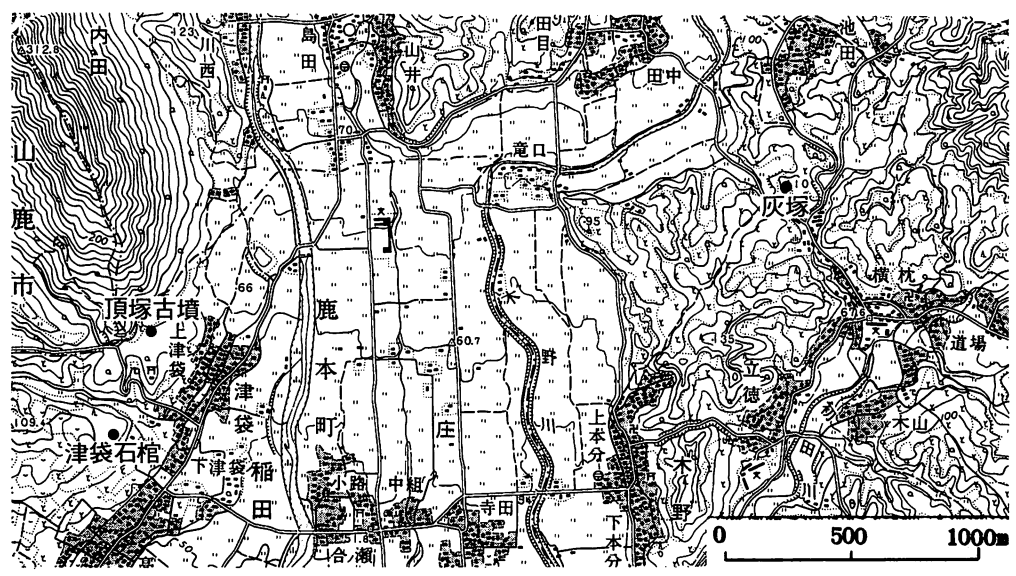
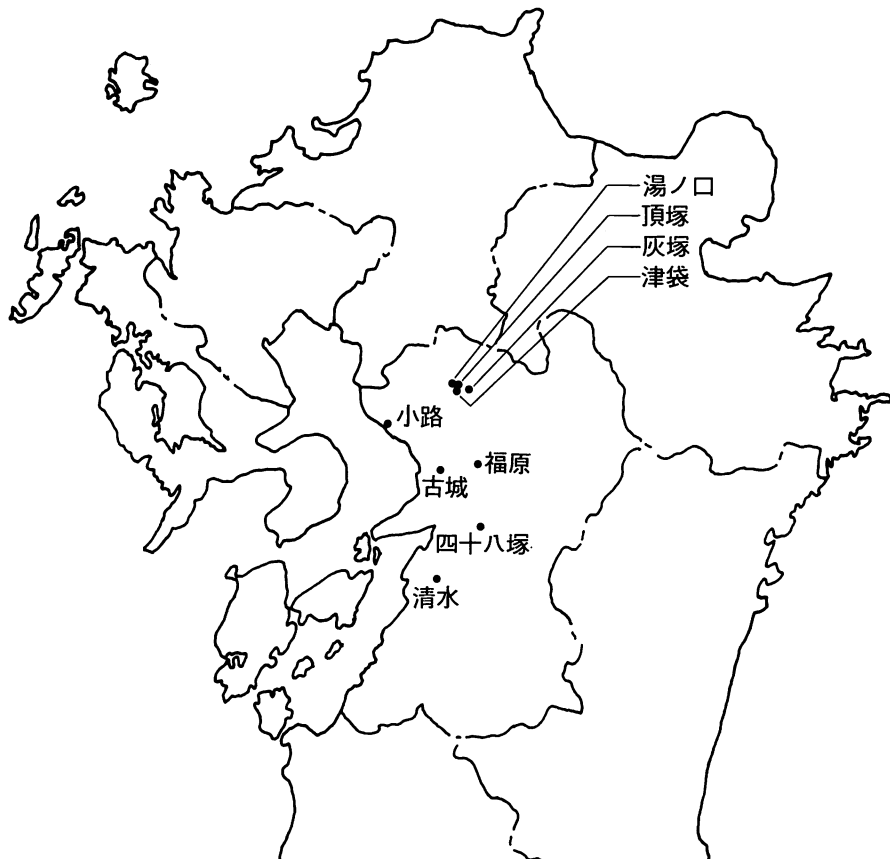


図1. 遺跡の位置 (Fig. 1. Location of the Haizuka site, Kikuka-Cho, Kumamoto Prefecture)

表1 人骨一覧 (Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年令	備考
第1主体1号人骨	不明	小児Ⅱ期(12才)	赤色顔料、石蓋土壙墓
〃 2号人骨	不明	不明	歯が1本のみ
第2主体人骨	不明	熟年	木棺墓(?)

これらの人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より、古墳時代前期(5世紀初頭)に属する人骨である。

この人骨の年令および年令区分に関しては、藤田(1965)による現代人の歯の萌出時期と金田(1957)による現代人の歯根の形成時期を用いて、古墳時代における歯の萌出と歯根形成時期が、現代のそれらと大差ないと仮定したうえで推定を行なった。また、年令区分は大友遺跡出土の幼小児骨(分部、1981)と同様の区分とした。

歯の計測は藤田(1949)の方法で小山田が計測し、齲歯の観察も小山田が行なった。

所見

第1主体1号人骨(性別不明、12才、【小児Ⅱ期】)

1. 頭蓋

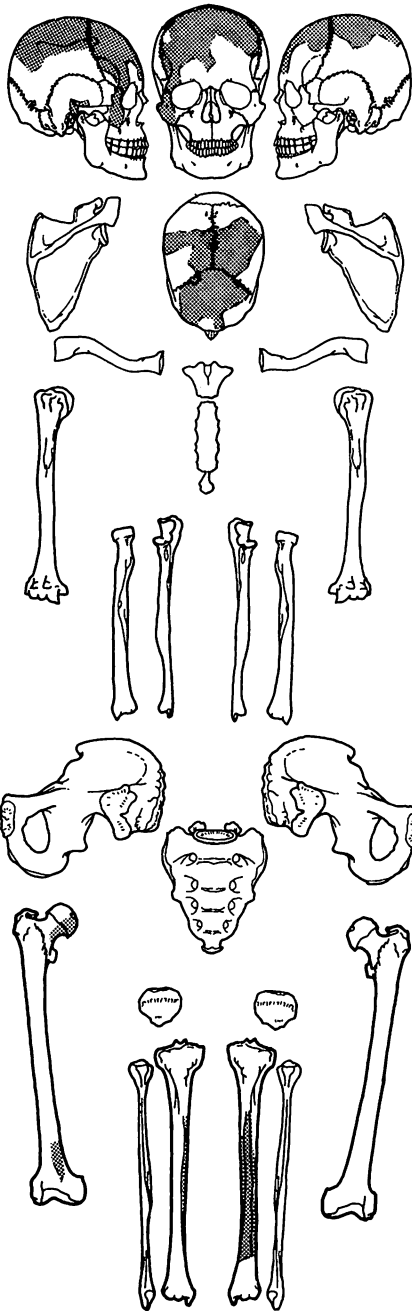
脳頭蓋は、前頭骨と両側の頭頂骨の前半部が残っている。これらの骨は残存部が少なく、また変形が著しいために計測は不可能で、頭型の推測もできない。しかしながら、年齢の割りに骨壁がやや厚く、脳頭蓋の大きさはそれほど小さくはないと考えられる。縫合は残存している範囲では、内外両板ともに癒合していない。

顔面頭蓋は、左側頬骨と遊離歯が残っているにすぎない。残存する歯を歯式で示すと次のとおりである。

$$\frac{(M_3)M_2M_2/P_1C/I_1}{(M_3)M_2M_1P_2P_1CI_2I_1} \left| \begin{array}{l} //C/P_2M_1M_2(M_3) \\ I_1//P_1P_2M_1// \end{array} \right. \left[\begin{array}{l} (): 歯槽内埋伏 \\ / : 不明 \end{array} \right]$$

歯はすべて永久歯で、歯根の残存している歯は少ない。咬耗の程度は、上下両顎の第三大臼歯は咬耗がなく、上下両顎の中切歯と上顎の左側犬歯がBrocaの2度、その他は1度で、全般に咬耗は弱い。歯根の形成状態は、下顎の右側犬歯と第二小臼歯の歯根先端が未形成で、その他の歯は不明である。

上顎では左側第二大臼歯、下顎では左側第一大臼歯および右側第二大臼歯に齲蝕が認められる。また、上顎の左右第一大臼歯にはカラベリー結節、下顎の左右第一大臼歯にはプロスタイ



灰塚第2主体人骨（熟年）
 (Haizuka 2, mature)

灰塚第1主体1号人骨（小児、12才）

(Haizuka 1-1, Juvenile)

図2. 人骨の残存部、アミかけ部分

(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

リッドが存在する。

なお、これらの歯とは別に下顎の右側側切歯が1本存在しているが、上記の人骨の歯と重複するので、別個体（第1主体2号人骨）のものである。

2. 四肢骨

残存しているのは、下肢骨である。

(1) 大腿骨

右側は骨頭と頸部の内側部、骨体の遠位内側部、内側顆および部位不明の骨体の一部が残っている。左側は部位不明の骨体の一部と内側顆とが残存している。いずれも計測は不可能である。

(2) 脛骨

右側は骨体の内側縁に沿う部分、左側は骨体の前縁および遠位の約1/4が残存している。これらは計測はできないが、骨体の遠位部は成人に比べると細い。

3. 骨化

骨化の進行状態を観察できるのは、右側大腿骨の骨頭のみで、この部は未癒合である。

4. 年令

年令を歯の萌出状態と歯根の形成程度から推定してみると、先ず、下顎の犬歯と第二乳臼歯の歯根の形成程度は、金田（1957）による現代人の12才に相当している。次いで、この人骨の歯は上顎の第二大臼歯まで萌出しており、藤田（1965）は、現代人におけるこの歯の萌出時期を男性平均11才11カ月、女性平均12才0カ月としている。また、咬耗が局部的で弱いことを考えあわせると、萌出状態からも12才と推定される。

第1主体2号人骨（性別、年令不明）

第1主体から検出された1号人骨とは別個体の下顎の右側側切歯1本である。先に述べたように、2体の遺体が埋葬されたと考えられるよりはこの歯が1本被葬者ととも埋納されたと考えた方が自然かもしれない。

第2主体人骨（性別不明、熟年）

保存状態は極めて悪く、脳頭蓋の骨片と四肢骨が少量残存するのみである。

脳頭蓋は矢状縫合とラムダ縫合が交わるラムダ付近の小片である。性別は不明であるが、縫合の内板がすでに癒合しているので、年令は熟年と推測される。また、骨壁はそれほど厚くはない。

四肢骨は長骨の一部で、骨種は不明である。

要 約

熊本県鹿本郡菊鹿町大字池永字池田に所在する灰塚古墳の緊急の発掘調査が1989年に行なわれた結果、主体部から人骨が検出された。遺構は半壊状態になっていたため、残存量は比較的多いものの、人骨の保存状態は著しく悪いものであった。残存部分について人類学的観察や計測を行ない、次の所見を得た。

1. 本古墳の内部主体は2基存在し、1基は石蓋土壙墓（第1主体）、残りの1基は木棺墓（第2主体）と考えられており、前者からは2体分の人骨（歯）が、後者からは1体分の人骨が検出された。
2. これらの人骨は古墳時代前期（5世紀初頭）に属する人骨である。
3. 第1主体の人骨には赤色顔料が全身に付着していた。
4. 第1主体1号人骨は12才と推定される小児（Ⅱ期）骨である。
5. 第1主体からは1号人骨とは別個体の下顎の右側側切歯が1本検出された。別個体と判別されるものはこの1本の歯のみであることから、被葬者とともに1本の歯が埋納された可能性が考えられる。
6. 第2主体から出土したのは頭蓋片と四肢骨片で、年齢は熟年と推測されるが、性別は不明である。

謝 辞

摺筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。

* Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI, Takayuki MATSUSHITA, Yoshiyuki ORIHARA
Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine
〔長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）〕

** Jouichi OYAMADA
Department of Oral Anatomy, Nagasaki University School of Dentistry
〔長崎大学歯学部口腔解剖学第二講座（主任：六反田篤教授）〕

参考文献

1. 藤田恒太郎、1949：歯の計測規準について。人類学雑誌、6：27-32.
2. 藤田恒太郎、1965：歯の話。岩波書店、東京：57-98.
3. 北條暉幸、1957：熊本県本渡市（天草）妻鼻古墳時代墳墓群出土人骨の予備的研究。札幌医科大学医学進学課程紀要、16：25-32.
4. 北條暉幸、1969：熊本県菊池郡七城村小野崎家型石棺（古墳時代）人骨について。熊本医学会雑誌、43：37-46.
5. 北條暉幸、松田愛人、1969：熊本県菊池郡西合志町「ハヤマ塚石棺」出土の人骨について。熊本医学会雑誌、44：653-658.
6. 北條暉幸、1978：向野田古墳の人骨について。向野田古墳（宇土市理蔵文化財調査報告書第2集）：157.
7. 北條暉幸、1979：小田良古墳（熊本県宇土郡三角町小田良）の人骨。三角町文化財調査報告：47
8. HOJO, T. 1982：A Prehistoric Female Skeleton of the Keyhole-shaped (Square Front Circular Rear) Mound in Mukonoda, Uto City, Kumamoto Prefecture. J. Anthropol. Soc. Nippon, 90：129-138,
9. 北條暉幸、1983：熊本県玉名郡菊水町江田大久保船型石棺人骨（会）。人類学雑誌、91：235.
10. 北條暉幸、1983：中部九州古墳時代人の頭蓋形態（会）。解剖学雑誌、58：425.
11. 金田義夫、1957：日本人永久歯における歯根完成時期の研究。歯科月報、30：165-172.
12. 松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1985：熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨。福原横穴墓群（熊本県文化財調査報告第77集）：29-42.
13. 松下孝幸、1985：玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡（玉名市文化財調査報告第6集）：32-48, 57-61.
14. 松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1985：熊本市古城横穴墓群出土の古墳時代人骨。古城横穴墓群（熊本県文化財調査報告第74集）：126-146.
15. 松下孝幸、中谷昭二、1986：熊本県鹿本町津袋大塚東側1号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側1号石棺出土人骨研究報告書（鹿本町文化財調査研究報告第2集）：5-33.
16. 松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1986：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群 菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(1)（山鹿市立博物館調査報告書第5集）：111-122.
17. 松下孝幸、分部哲秋、佐伯和信、弦本敏行、1988：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群（Ⅱ）菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(3)（山鹿市立博物

- 館調査報告書第8集)：53-63.
18. 松下孝幸、分部哲秋、佐伯和信、1989：熊本県七城町瀬戸口横穴墓出土の古墳時代人骨。北上原古墳・瀬戸口横穴墓群（熊本県文化財調査報告書第104集）：97-107.
 19. 松下孝幸、分部哲秋、佐伯和信、弦本敏行、小山田常一、1989：熊本県下益城郡中央町四十八塚5号墳出土の古墳時代人骨。堅志田城跡・四十八塚古墳（熊本県下益城郡中央町文化財調査報告書第1集）：77-114.
 20. 永井昌文、1982：城二号墳人骨について。宇土市史研究、第3号：11-14.
 21. 内藤芳篤、分部哲秋、1980：清水1号古墳出土の人骨について。清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓（熊本県文化財調査報告第41集）：22-28.
 22. 内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾5号墳出土の人骨。熊本県文化財調査報告、第16集：317-322.
 23. 分部哲秋、1981：佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：245-264.

Human Skeletal Remains Excavated from Haizuka Tumulus, Kumamoto Prefecture.

Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI, Takayuki MATSUSHITA, Yoshiyuki ORIHARA,
[Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine]

Jouichi OYAMADA

[Department of Oral Anatomy, Nagasaki University School of Dentistry]

Keywords : Kumamoto Pref. ,Kofun skeleton, burial pit with stoneslab cover, poor
preservation, juvenile,

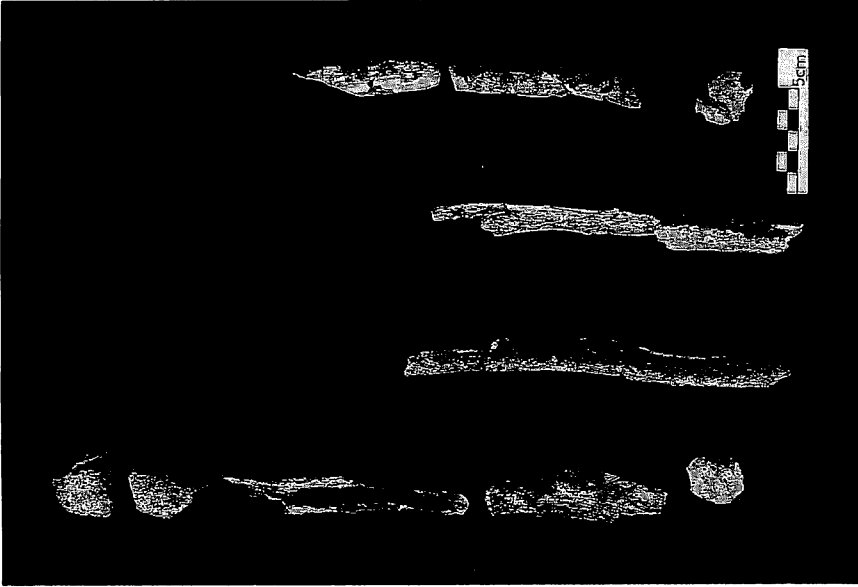
Three human skeletal remains dating the early phase of the Kofun Period (5 th century A. D.), consisting of two adults and one juvenile, were excavated from the burial the pit at the Haizuka tumulus, Kikuka-cho, Kamoto-gun, Kumamoto Prefecture, in 1989.

Due to the poor preservation of these skeletons, it is not possible to measure the bones, and only anthropological observation was conducted.

Skeleton 1-1 is juvenile estimated to be 12 years old. However the sex is unknown.

There is another tooth (Skeleton 1-2) from Skeleton 1-1 in the burial pit with stone-slab cover. The sex and age can not be estimated.

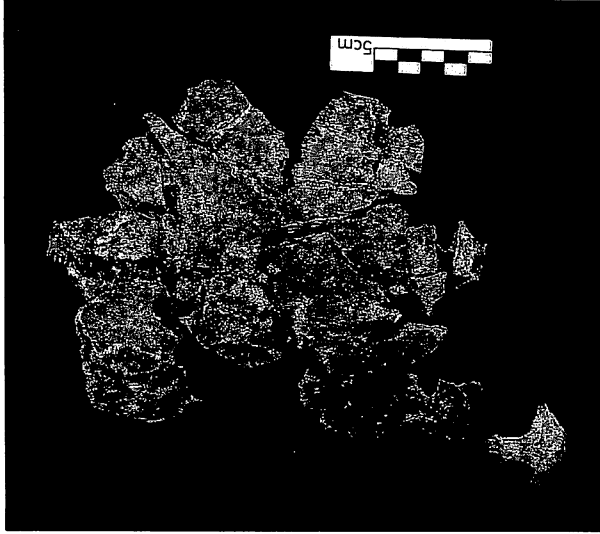
Skeleton 2 is a mature but the sex is unknown.



四肢骨 (Limb bones)

灰塚第1主体1号人骨 (小兒、12才)

(Haizuka 1-1, Juvenile)



頭蓋 (Skull)

表2 歯の計測値 (mm)

(Table 2. Measurements of the teeth)

		灰塚古墳 第1主体1号人骨 (12歳)		
		右	左	
上顎	I ₁	—	—	
	I ₂	—	—	
	C	—	9.34	
	P ₁	10.23	—	
	P ₂	—	9.55	
	M ₁	13.13	12.94	
	M ₂	13.43	13.25	
頬 (唇)	M ₃	12.81	12.15	
	<hr/>			
	舌 下顎	I ₁	6.54	6.50
径	I ₂	—	—	
	C	8.61	—	
	P ₁	9.10	8.95	
	P ₂	9.01	8.81	
	M ₁	11.75	11.77	
	M ₂	11.70	—	
	M ₃	12.07	—	
<hr/>				
上顎	I ₁	—	—	
	I ₂	—	—	
	C	8.75	—	
	P ₁	7.57	—	
	P ₂	—	6.96	
近 遠	M ₁	11.95	11.52	
	M ₂	11.30	11.31	
	M ₃	9.57	9.38	
<hr/>				
心 径	下顎	I ₁	5.68	5.97
	I ₂	6.48	—	
	C	7.10	—	
	P ₁	7.36	—	
	P ₂	7.52	7.65	
	M ₁	12.41	12.44	
	M ₂	11.79	—	
M ₃	12.34	—		

表3 齲蝕

(Table 3. Caries of the teeth)

		灰塚古墳 第1主体1号人骨 (12歳)	
		右	左
上顎	I ₁	/	/
	I ₂	/	/
	C	/	/
	P ₁	○	/
	P ₂	/	○
	M ₁	○	○
頬	M ₂	○	1
	M ₃	○	○
	<hr/>		
下顎	I ₁	○	○
	I ₂	○	/
	C	○	/
	P ₁	○	/
	P ₂	○	○
	M ₁	○	1
近 遠	M ₂	2	/
	M ₃	○	/

[1~4 : present, ○ : absent,
/ : unobservable]

熊本県鹿本郡菊鹿町尾迫古墳調査報告

池田 栄史*

1. はじめに

尾迫古墳は熊本県鹿本郡菊鹿町大字木野字尾迫3718番地に所在する古墳である。

昭和57年夏、古墳主体部に採用される横穴式石室の構造に関心を持っていた筆者らは、國學院大學教授乙益重隆先生より本古墳が横長の横穴式石室である可能性を持つとの教示をいただき、本古墳の試掘調査を思い立った。そこで、熊本県教育委員会文化課に問い合わせ、調査についての理解をお願いしたところ、菊鹿町教育委員会や地主近藤秀雄氏との交渉の機会が得られ、同年12月に調査を実施できる運びとなったものである。

現地での調査は当初の予定に基づき、同年12月21日から29日までの9日間にわたって実施したが、調査に際しては、先述したように熊本県教育委員会文化課や菊鹿町教育委員会及び同町文化財保護委員会、地主近藤秀雄氏の多大な理解と協力をいただいた。

また、調査の間には國學院大學助教吉田恵二先生をはじめ、熊本市立博物館富田紘一氏・熊本県教育委員会文化課松本健郎・鶴嶋俊彦（現、人吉市教育委員会）・古森政次（現、合志町立合志中学校教諭）・森山栄一（現、福岡県筑紫野市教育委員会）氏、文化財保存計画協会荒井仁・勢田広行（現、荒尾市教育委員会）氏、福岡県小郡市教育委員会速水信也氏、松藤登志子・田尻悦子氏など多くの方々の現地指導・協力をいただいた。

なお、本古墳の調査成果については速やかに報告を行う予定であったが、予算的問題と筆者の転勤・転居に伴う作業の中断などもあり、今日まで果たせずにいる。今回、熊本県教育委員会のご厚意により、報告の機会を与えていただいたことに心から感謝する次第である。

最後に、現地での作業には、当時國學院大學の考古学専攻であった学生が参加していた。あれから10年近くとなり、各人ともそれぞれの分野で活動している。ここでは氏名と当時の学年を記しておきたい。

[調査担当者] 池田 栄史（当時、國學院大學文学部助手）

[調査参加者] 古庄 浩明（当時、國學院大學4年）

古谷 毅（ 々 4年）

谷口 浩子（ 々 3年）

横田かやの（ 々 3年）

渡辺 幸弘（ 々 3年）

竹田 宏司（ 々 2年）

* 琉球大学法文学部助教授

2. 調査の概要（調査日誌抄）

12月21日（火）

現地一帯が冬場の落葉で覆われていたため、まず落ち葉の除去を行い現況写真を撮影する。これと並行して、周辺地形の測量も行う。合間を見て、調査に際しての挨拶回りにいく。

12月22日（水）

周辺地形の測量を続行する。

12月23日（木）

石室と推定される位置に仮調査区を設定し、表土を掘り下げる。仮調査区内で石室の輪郭がほぼ観察できたので、地元の神官にお願いして、御祓を行う。

12月24日（金）

石室内の掘り下げを続けるが、石室の南側に羨道部の輪郭が現われ始める。

12月25日（土）

調査状況を菊鹿町文化財保護委員の皆さんが視察に見える。石室内に天井石と考えられる大石が陥落しているのを見て、午後からチェーンブロックを貸していただいたばかりか、除去の指導までしていただく。

12月26日（日）

石室床面近くまで掘り進むが、盗掘によって側壁石材の根固め石が露出するほどまでに深く掘り下げられていることが判明する。遺物の検出を想定して石室床面を9区に区切り、露出作業を行う。また、石室内に引き続いて、羨道部および墓道の掘り下げと石室主軸線延長上に試掘溝の設定を行う。羨道部掘り下げの際に凝灰岩製石棺材の破片と思われる石材が出土する。また、羨道部床面からはガラス小玉1点と管玉1点、墓道から須恵器口縁破片が検出されるとともに、墓道と墳裾部の位置が確認される。

12月27日（月）

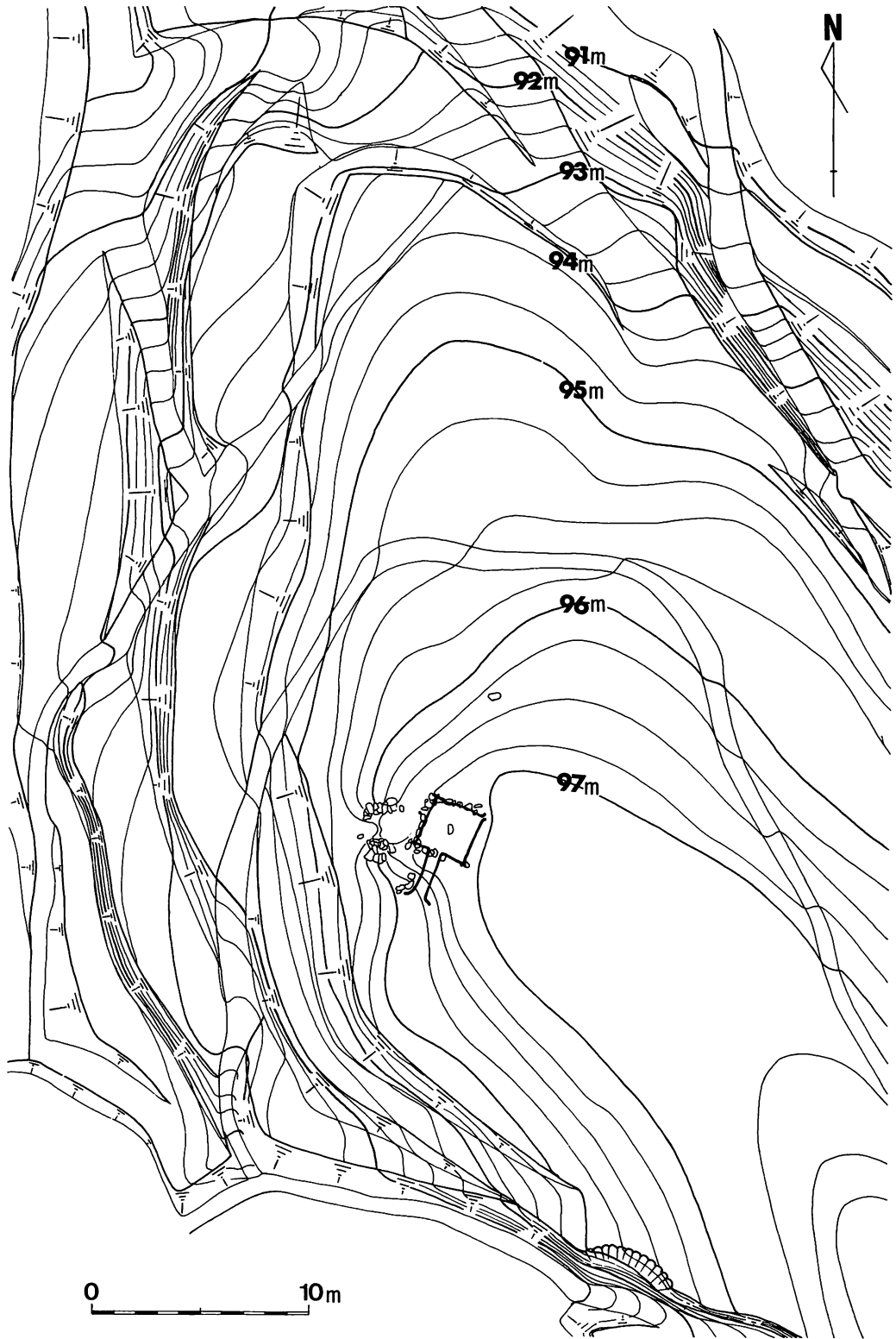
掘り下げ作業を終了した後、遺物出土状況および掘り下げ状況の写真撮影を行う。遺物取り上げ後、石室実測を始める。

12月28日（火）

引き続き、石室実測を行う。また、墓道が西に曲がりながら山裾へと伸びることが予想されたため、調査区を拡張して確認作業を行う。この拡張区から土師器片10数点が検出される。

12月29日（水）

昨日の拡張区で検出した遺物の取り上げを行うとともに、石室実測図の完成を急ぐ。午後3時過ぎに石室実測図完成。最後の写真撮影を行い、埋め戻しにかかる。午後6時、周辺に暗闇が迫る中、埋め戻しを終わる。手締めにて、調査の無事終了を祝った後、機材の撤収を行う。



第1图 尾泊古墳周辺地形図

3. 調査

(1) 墳丘（第1・2図、写真1）

尾迫古墳は南から北西へ伸びる舌状台地の先端部に位置する。台地の頂部の標高97mを計るあたりに平場があり、そこからやや角度を持ちながら傾斜する斜面へと移行する。古墳は台地先端部の平場から傾斜面へと転換する位置に構築されていることになる。しかしながら、古墳の立地する台地上は現在栗畑として利用されており、それ以前には畑作にも使用されていた痕跡が残っている。このため、古墳周辺は平らに均されており、現況から古墳の墳丘を確認することはできない。

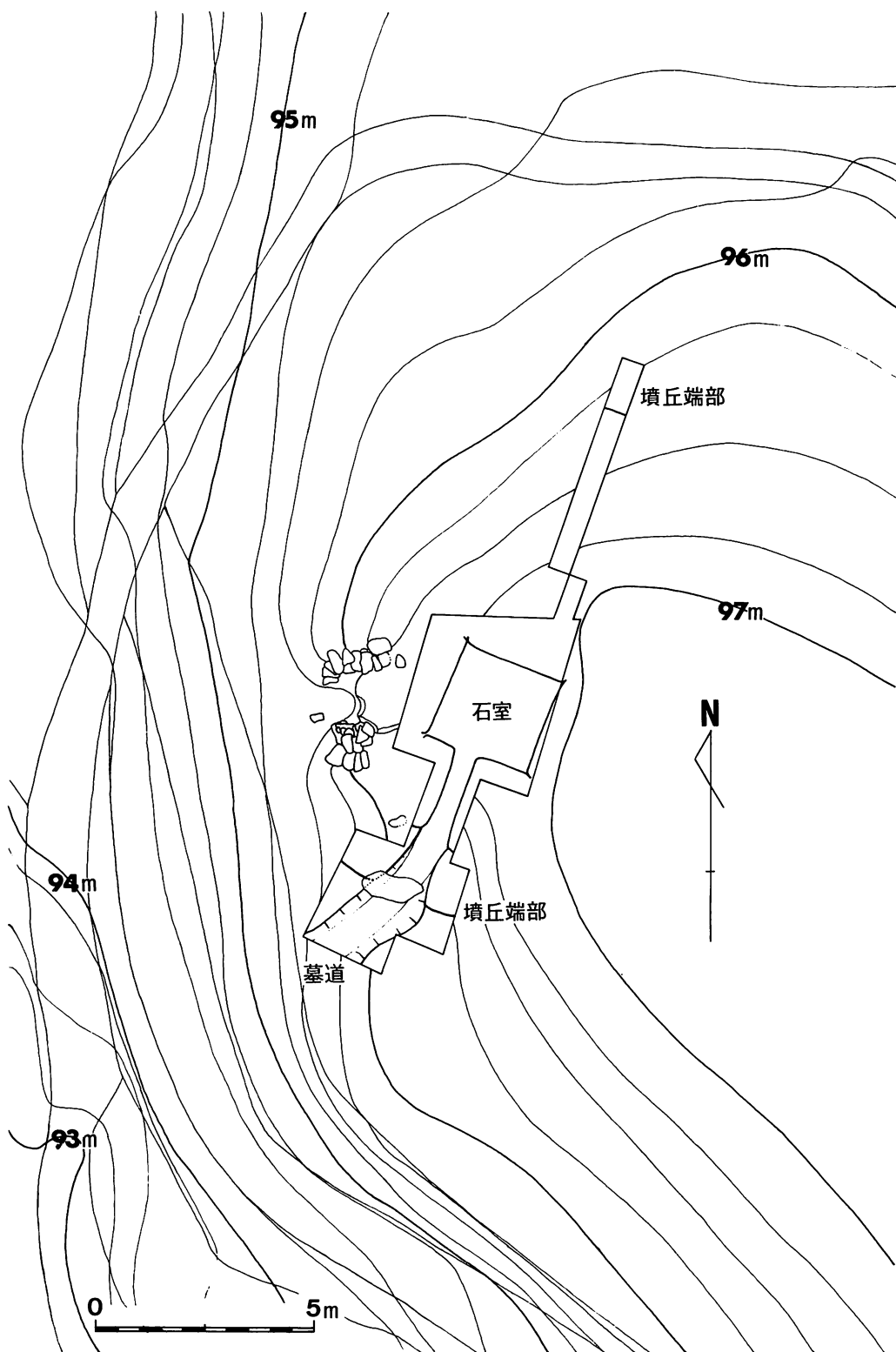
このような中で、本墳が古墳と確認できたのは、古墳主体部と思われる位置に塊石を一辺3m程の方形に配置し、その中央に長方体の石材が標石状に立てられていたことによる。おそらくこれは墳丘を含めた周辺部の削平の際に、掘り当てた石室に配慮して造作したものと考えられ、周辺の方々もこの石列と石室の存在については御存じであった。また、この石列の西側には石材を積み上げ、その上に大型石を高架した部分があり、ここが羨道部であることも想定された。しかしながら、聞き取りによってここはかつて周辺で畑作を行っていた際に、雨避けや道具置き場に使用していた場所であると判明した。古墳を削平した際に、露出した天井石を横に移動させ、その下に簡単な空間を作り出したものと考えられる。なお、実際の羨道部については、調査の過程で南に開口していることが確認された。

墳丘の規模については、羨道および墓道を確認する過程で検出された墳丘前端部から、石室の主軸に沿って奥壁の後方に設定した試掘溝で検出された墳丘後端部までの距離を計測した結果、直径約12mの円墳であろうと考えられる。ただし、今回の調査では時間的な制約と周辺の削平の状況から周溝が確認できなかったため、この計測値はあくまでも墳裾から墳裾までの規模である。なお、この計測値から見ると、石室奥壁がちょうど墳丘の中心に位置することになる。

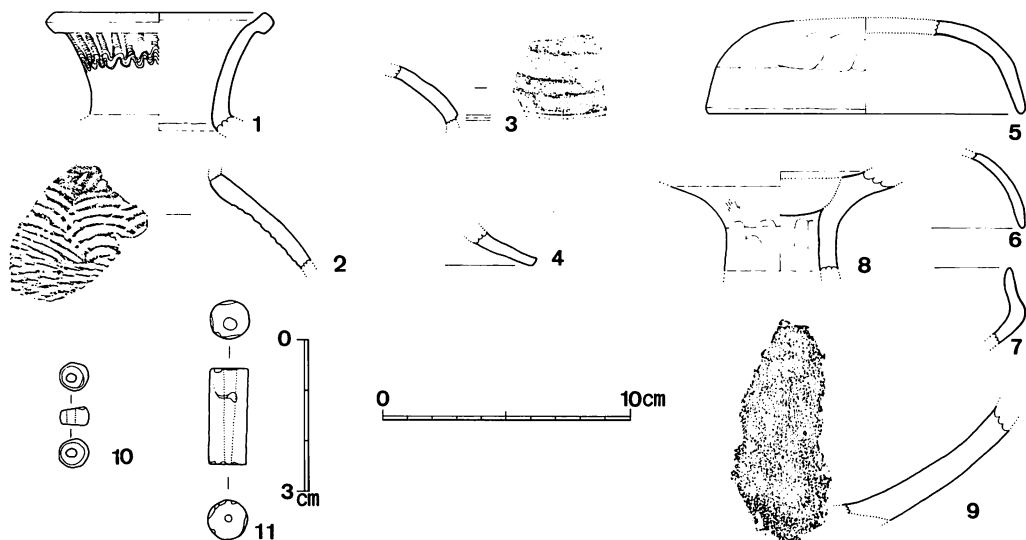
現存する石室は地山を掘り込んで構築したものと考えられるが、削平されてしまった墳丘盛土とその構造についてはほとんど手掛かりがなく、不詳である。

(2) 石室（第2図、写真2・3）

本墳の主体部は単室の横穴式石室である。墳丘削平時に石室の上半部が取り除かれ、現状では石室の下半部約1m程が残存する。奥壁および両側壁はそれぞれ2枚の大型石材を腰壁石として配置し、その上に塊石を積み上げる。石室前壁および羨道部両壁は基底部に大型石材を配置するが、石材と石材の合間が開く部分には塊石を補填している。現状で観察する限り、石室の積み石には裏込めの石材がほとんど見当たらない。また、羨道部の床面が残存しているのに



第2図 尾迫古墳調査区設定図



第3図 尾迫古墳出土遺物（1/3 玉類は2/3）

対して、石室内はかなり深く掘り下げられており、床面施設は何も残っていない。現状での石室幅約250cm・同奥行き約240cm余りを測り、やや幅広気味の正方形を呈する。

羨道部はほぼ正方形の石室に対して少し西側に付設されており、幅約60cm・奥行き約240cmを測る。羨道部幅は石室側から墓道に続く出入り口側に移行するに従って、やや広がり気味となるが、石室から真っ直ぐに伸びていることが特筆される。また、羨道部の積み石は出入り口部分で、墳丘に沿うように左右へ開いており、墳丘に対する外護機能を果たしている。この羨道部に地山を掘り込んで作られた墓道が、やや西側へ曲がりながら続く。

(3) 出土遺物（第3・4図、写真4）

本墳の出土遺物には須恵器数点・土師器20数点と凝灰岩製石棺材の一部と思われる破片があった。この内、実測可能なものには須恵器4点・土師器5点および管玉1点・ガラス玉1点と凝灰岩製石棺材がある。

① 須恵器（第3図1～4・写真4）

1は、甕あるいは提瓶の口縁部と考えられ、6片から接合する。口径8.4cmを計る。緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部外面に回転を利用した櫛描波状文を施す。灰白色を呈し、焼成はあまり良くなく、撫でるとホコリ状に磨耗する。2は壺の肩部と考えられる破片であるが、細片のため全体の復元はできない。器内面に青海波状文、外面に叩き成形の後ナデ調整を施した痕跡が見られる。青灰色を呈し、焼成は良好である。3は蓋坏の体部破片であり、体部から口縁部へと移行する位置に見られる沈線が残る。器外面上半部にヘラケズリ、その他の部分にはナデ調整の痕跡が見られる。青灰色を呈し、焼成も良好である。4は高坏の脚部と見られる

破片であるが、2・3と同様に細片のため、全体の復元はできない。灰褐色を呈し、焼成は堅緻である。

② 土師器（第3図5～9）

5は蓋坯と考えられる破片で、復元口径12.4cmを測る。緩やかに下降する体部から直口する口縁部へと移行する。器表面は剥落しており、調整などの詳しい観察はできないが、器外面にヘラ状工具によるナデ調整の痕跡が残る。6も同じく蓋坯の口縁部片と考えられるが、細片のため全体の復元はできない。5に対して薄手の作りである、内外面に黒い漆状のものを塗布した痕跡が残る。7は坯身であるが、やはり細片のため全体復元ができない。須恵器坯を模倣した立ち上がり部分の破片である。8は高坯の体部と脚部の接合部分であり、坯部の底に胎土を円板状にして貼り付けた技法が観察される。器内外表面は剥落しているが、外面に指押さえおよびナデ調整、脚部内面に絞り上げ成形の痕跡が見られる。8は壺の底部破片であるが、やはり器全体の復元はできない。内外面とも刷毛目の痕跡が見られ、下端部には接合跡が残る。

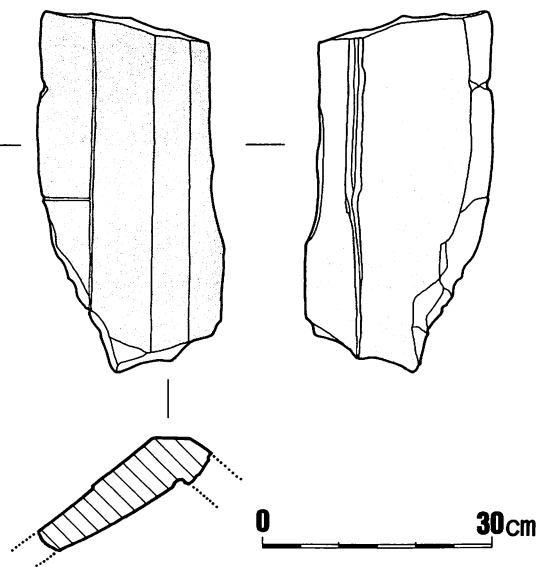
③ 玉類（第3図10・11）

10はガラス小玉であり、上面観は円形を呈するが、側面はやや台形状をなす。径6mm・最大厚3.3mm・孔径2mmを測り、色調はコバルトブルーである。

11は碧玉製管玉で、上面観はやや歪ながら直径8mm、高さ10mmを測る。上面観が歪であるのは玉の成形に際して、角柱状の石材を研磨した結果と考えられる。孔は片方から穿たれ、上面径約2mm、下面径約1mmを測る。一部に傷が見られ、色調は深緑色を呈する。

④ 凝灰岩製石棺材片（第4図）

石棺もしくは石屋形状施設の蓋材と考えられる破片である。現存部長47cm・幅25cm・厚さ8cm前後を測る。石棺の屋根の一部らしく、外面には尾根の稜線と屋根の段差などが粗削りに表現される。また、内面の尾根の反対側に当たる位置にも稜線が見られるが、ここに後世の掘り込みらしい溝が切られている。割れ口を除いて、本来の造作が残っていると見られる部分には赤色顔料が塗布されている。



第4図 石室出土凝灰岩製石棺材
(アミ部は赤彩部分)

4. 調査のまとめ

最後に本調査によって明らかになった点についてまとめておきたい。

まず、本古墳は直径12mほどの円墳であった。主軸線に沿った試掘溝のみからの判断ではあるが、直径12mしかない後円部を持つ前方後円墳は考え難いので、穏当なものと考えられる。ただし、この規模は墳端から墳端までのものであり、周溝の存在については確認していない。また、墳丘の上半部はすでに削平されており、現状の地形から古墳であると識別することは難しい。

古墳の主体部は単室の横穴式石室であり、比較的細長い羨道部を持つ点に特徴が見られる。墳丘の削平にともなって石室の上半部も取り除かれ、現況では石室床面から1mあたりまでしか残っていない。石室幅約250cm・奥行約240cm、羨道部幅60cm・奥行約240cmを測る。石室積み石は基底部に大型石材を腰壁石として配置し、その上に塊石を積み上げるもので、表面観察の上からは裏込めの積み石はほとんど見られない。石室平面観は正方形を呈する肥後型石室であり、石室内の床面施設は掘り下げによってほとんど観察できない。ただ、羨道部覆土の掘り下げに際して、凝灰岩製石棺材の一部が見つかったことからすれば、あるいは家型石棺もしくは石屋形状の施設があった可能性もある。石室に続く羨道部は石室から真っ直に伸びており、肥後型石室の多くに見られる羨門部の袖石の突出が見られない。また、羨道部は石室の西側に偏って付設されていて、やや片袖状を呈する。この羨道部の前方に西へ曲がりながら斜面を下る墓道が作り付けられている。

出土遺物は主に羨道部と墓道部から検出されており、須恵器片・土師器片・管玉・小玉などがある。須恵器片には、甕あるいは提瓶の口縁部・蓋杯・壺肩部・高杯脚部などがあり、熊本地方の須恵器編年では第Ⅱ様式、もしくは第Ⅲ様式あたりに位置付けられるものと考えられる^{註1}。したがって、本墳の年代は6世紀前半から中葉頃と想定される。この年代観は土師器杯蓋あるいは杯身の編年観からも穏当であろう。ただし、今回の調査は全面的な調査によるものではないため、追葬の有無などを含めた詳細な年代については不詳である。

以上、本古墳における知見をまとめたが、本文が「灰塚古墳」理解の一助になれば幸いである。

(註)

1. 松本健郎編「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」【熊本県文化財調査報告】第48集 1980



写真1 発掘前（西南方より）

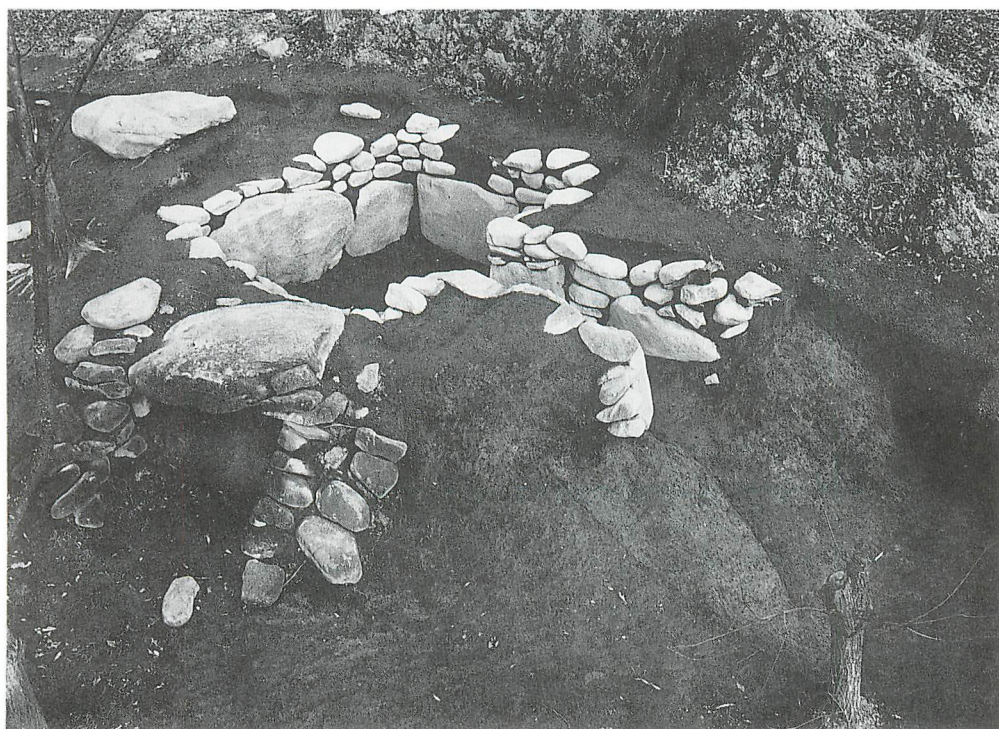


写真2 石室完掘状況（西南方より）

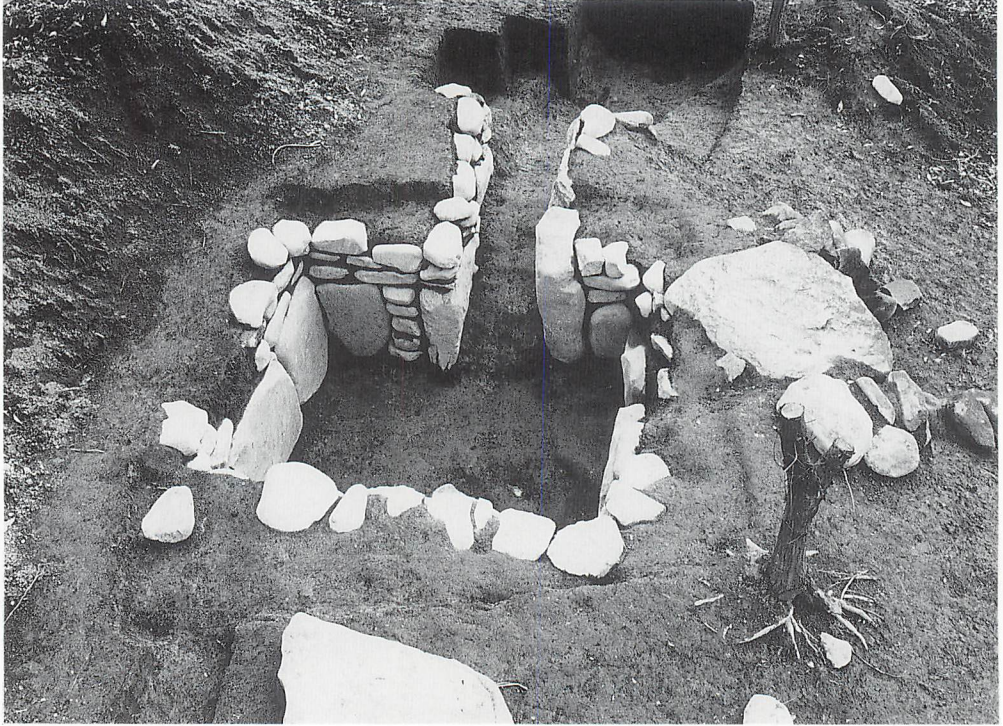


写真3 石室完掘状況（北方より）

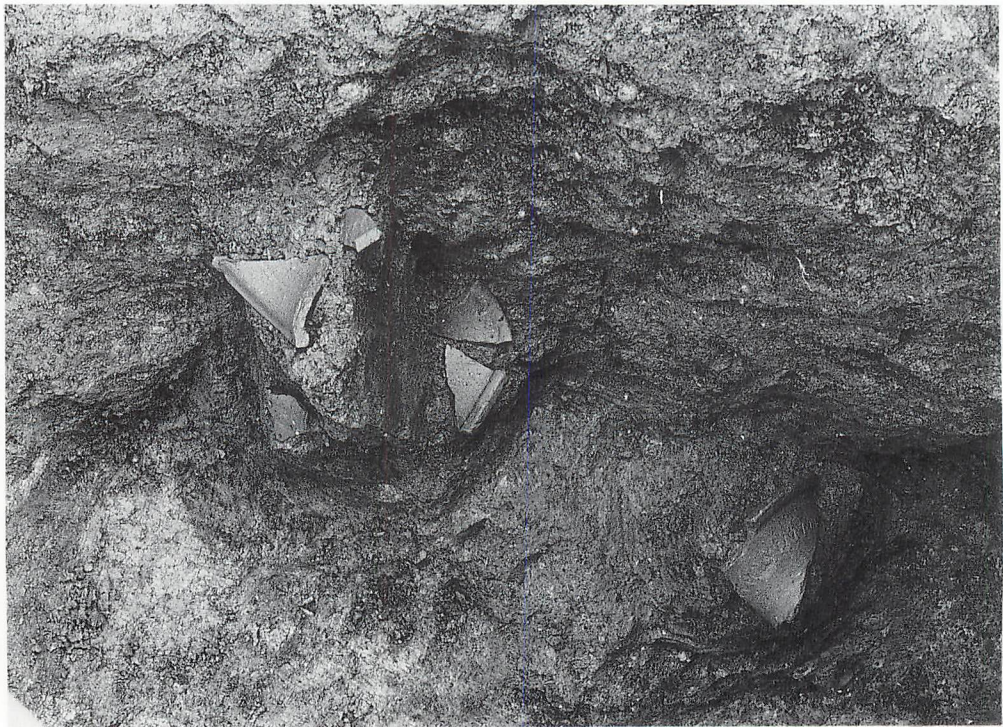


写真4 羨道部遺物出土状況（第3図1）

熊本県文化財調査報告 第114集

灰 塚 古 墳

1991年 3月31日

編集・発行 熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷所 (株)大和印刷所

〒862 熊本市戸島町920-11

02 教委 教文

②003

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 114 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：灰塚古墳

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL： <http://www.kumamoto-bunho.jp/>